

## 6.2 生物多様性



## 6.2 生物多様性

### 6.2.1 動物

公園及び墓園整備事業の実施により、工事中は建設行為等、供用時は施設の存在・土地利用の変化が、動物相に影響を及ぼすおそれがあります。

そこで、公園及び墓園整備事業の工事中及び供用時の動物相への影響を把握するために、調査、予測、評価を行いました。

以下に調査、予測、評価等の概要を示します。

#### 【建設行為等及び施設の存在・土地利用の変化に伴う動物相への影響（1）】

項目	結果等の概要	準備書 該当ページ																				
調査結果の概要	<div>・現地調査において対象事業実施区域及びその周辺で確認した動物相は、下表のとおりです。</div> <div>動物の確認状況</div> <table><tr><td>哺乳類</td><td>3 目</td><td>6 科</td><td>6 種</td></tr><tr><td>鳥類</td><td>10 目</td><td>28 科</td><td>54 種</td></tr><tr><td>両生類・爬虫類</td><td>2 目</td><td>5 科</td><td>5 種</td></tr><tr><td>昆虫類</td><td>14 目</td><td>160 科</td><td>642 種</td></tr><tr><td>水生生物</td><td>17 目</td><td>34 科</td><td>60 種</td></tr></table>	哺乳類	3 目	6 科	6 種	鳥類	10 目	28 科	54 種	両生類・爬虫類	2 目	5 科	5 種	昆虫類	14 目	160 科	642 種	水生生物	17 目	34 科	60 種	p. 6. 2-12～ p. 6. 2-43
哺乳類	3 目	6 科	6 種																			
鳥類	10 目	28 科	54 種																			
両生類・爬虫類	2 目	5 科	5 種																			
昆虫類	14 目	160 科	642 種																			
水生生物	17 目	34 科	60 種																			
環境保全目標	<div>・注目すべき動物種等の動物相及びその生息環境への影響を最小限に留めること。</div>	p. 6. 2-44																				
予測結果の概要	<div>・工事の実施に伴い、対象事業実施区域内の樹林等や草地（高茎、低茎、湿地）が改変するため、これらの環境に生息する種に影響を及ぼす可能性が想定されますが、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、建設行為等による生息環境への影響は低減されると予測します。</div> <div>・供用時においては、樹林等や草地（高茎、低茎）の復元を図っていきます。また、公園内には約2.9haの草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出、人為的な管理（草刈り）等の生息環境の保全・創出を図っていくことで、現況と同程度の機能を維持できる形で復旧を行う計画であり、時間の経過とともに生息環境として利用できる状態を回復していくことで影響は低減されると予測します。</div>	p. 6. 2-46～ p. 6. 2-61																				

※ 調査・予測・評価等の詳細は、右欄の参照ページで確認願います。

【建設行為等及び施設の存在・土地利用の変化に伴う動物相への影響（2）】

項目	結果等の概要	準備書 該当ページ
環境の保全のための措置	<p>【工事中】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生息環境への影響が大きいと予測されたモノアラガイ、アサヒナコミズムシについては、工事着手前に再度生息の有無について確認を行い、生息が確認された場合は必要に応じて専門家の意見等を踏まえ、工事着手前に移設を行います。</li> <li>・公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施します。</li> <li>・動物の生息環境となる草地（チガヤ群落）は表土の移設を行います。</li> <li>・動物の避難経路の確保に配慮した施工に努め、建設機械の稼働が集中しないような工事計画を策定することにより、人圧等による動物への影響が低減できるよう配慮します。</li> <li>・夜間作業は原則として行わず、照明等による夜行性動物への影響をできる限り回避します。また、作業員の出入りや重機の稼働時間を規定することで、周辺に生息する動物への人圧低減効果が見込まれます。</li> <li>・工事区域外への不必要な立ち入り等を制限することで踏みつけ等による保全対象種への影響回避が見込まれます。</li> <li>・可能な限り低騒音型・低振動型建設機械を採用する等、騒音・振動の低減に努めます。</li> </ul> <p>【供用時】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象事業実施区域内にできる限り樹林等、草地（高茎、低茎）の復元を図るとともに、公園内には約2.9haの草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区の創出を図ることで、人圧等による動物への影響が低減できるような計画を策定します。</li> <li>・保護区内は草刈りの頻度を人為的に調整し、草丈のまばらな高茎草地・低茎草地をパッチ状に形成させ、構成種や草丈が様々となる質の高い草地環境を創出・集約化を図ることで、草地（高茎・低茎）の生態系の維持・多様化を図っていきます。</li> <li>・樹林等の環境では、郷土種を主体とした生物多様性向上に貢献する植栽計画を行い、高木、中木、低木、草本を組み合わせます。</li> <li>・草地環境では、草刈りの頻度を人為的に調整し、草地（高茎）や草地（低茎）がまばらな草地環境がパッチ状に形成させていくことで、草地（高茎）に生息する種に対する生息環境の代償効果を見込むことができ、人圧等による動物への影響低減が図られた計画を策定します。</li> <li>・駐車場や野球場、球技場、テニスコート、陸上競技場等の利用や通路等に設置される照明（園内灯）は、昆虫類が好む紫外線をカットし、誘引性を低減させるLEDランプや高圧ナトリウムランプを使用します。</li> <li>・カラス類やクリハラリス、アライグマ等の外来種が残飯等に依存して増加することがないようごみの処理を適切に行います。</li> </ul>	p. 6. 2-62
評価の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予測結果を踏まえ、工事中及び供用時において環境の保全のための措置を適切に講ずることで、環境保全目標「注目すべき動物種等の動物相及びその生息環境への影響を最小限に留めること。」は達成されるものと考えます。</li> </ul>	p. 6. 2-63

※ 調査・予測・評価等の詳細は、右欄の参照ページで確認願います。

## 1) 調査

### ① 調査項目

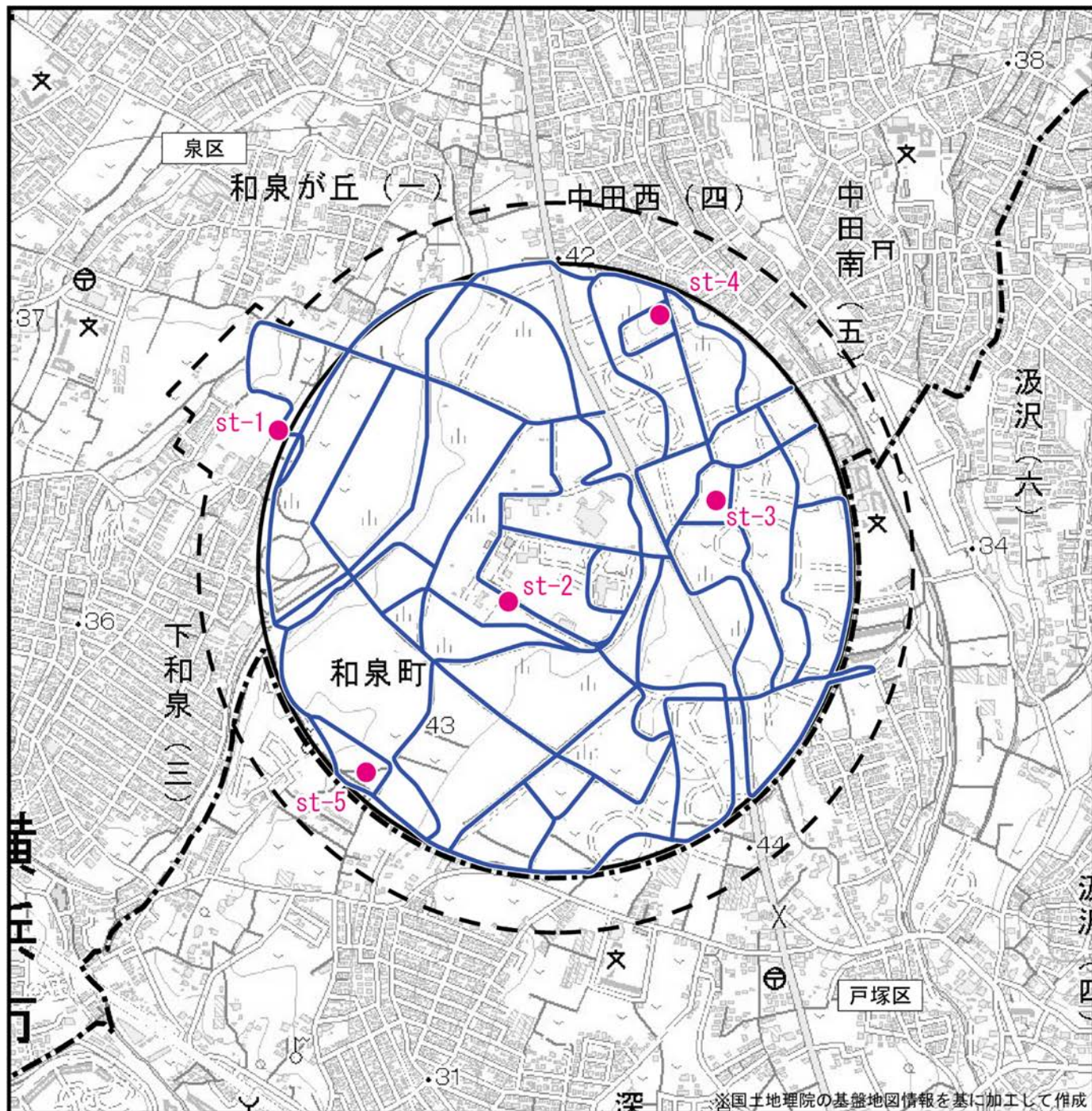
公園及び墓園整備事業の実施に伴う動物相への影響について予測及び評価を行うための資料を得ることを目的として、以下に示す項目について調査しました。

- ①動物の状況
- ②地形、地質の状況
- ③土壌の状況
- ④水質、底質の状況
- ⑤水循環の状況
- ⑥土地利用の状況
- ⑦関係法令、計画等

### ② 調査地域・地点

調査地域は、対象事業実施区域とその周囲 100mの範囲（わきみずの森を含む）としました。

現地調査地点は、図 6.2.1.1～図 6.2.1.5 に示すとおりです。



### 凡 例

- 対象事業実施区域
- 対象事業実施区域 +100m
- : 区 境
- : 哺乳類踏査ルート
- : 哺乳類トラップ・夜間撮影調査地点  
(st-1 ~ st-5) / 春季、秋季

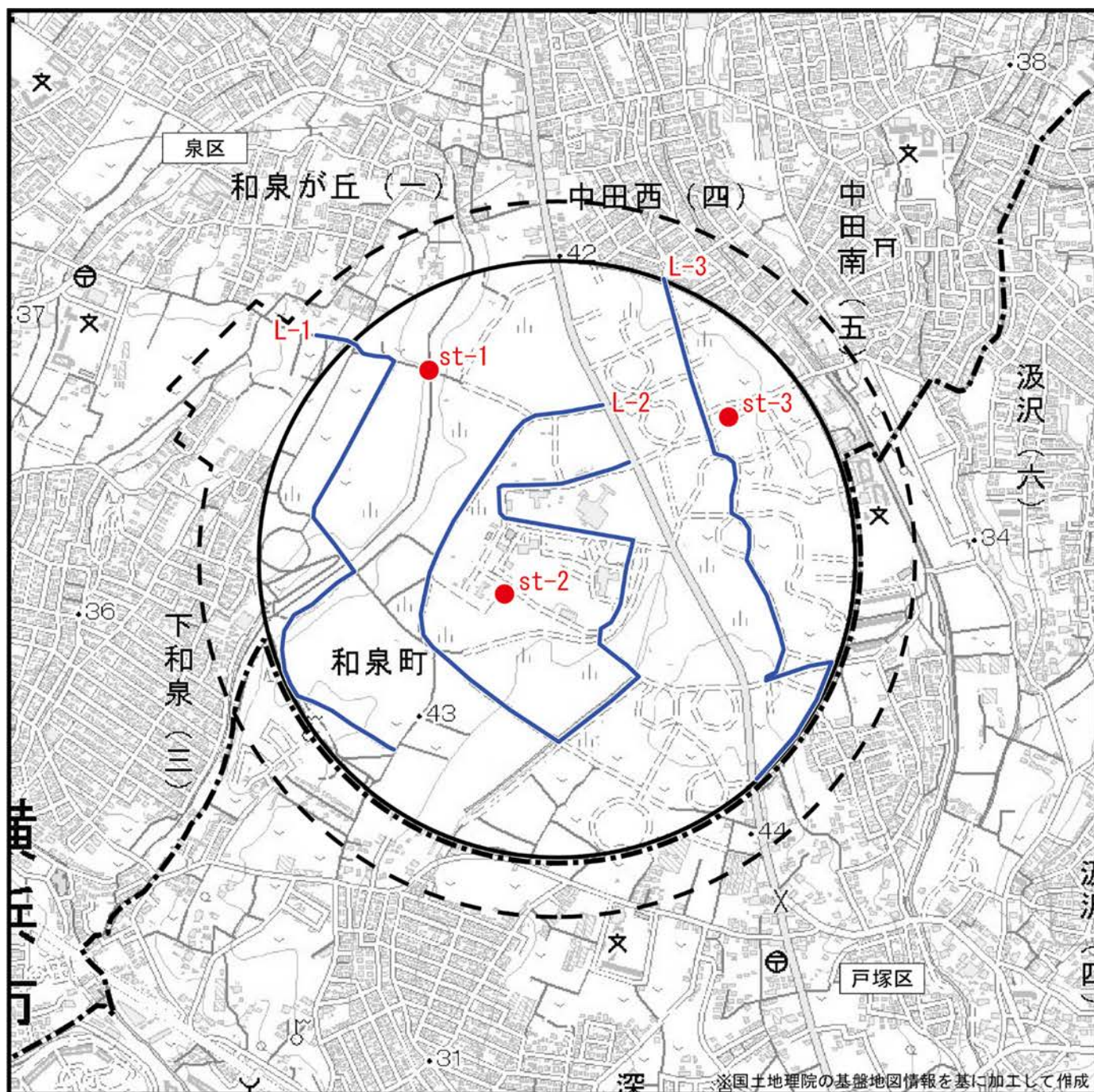


0 100 200 400 m

1:10,000

図 6.2.1.1 哺乳類調査地点  
(現地踏査ルート及びトラップ調査、  
夜間撮影位置)





# 凡 例



-----: 区 境

—: 鳥類ラインセンサス (L-1~L-3)

●: 鳥類スポットセンサス位置 (st-1~st-3)

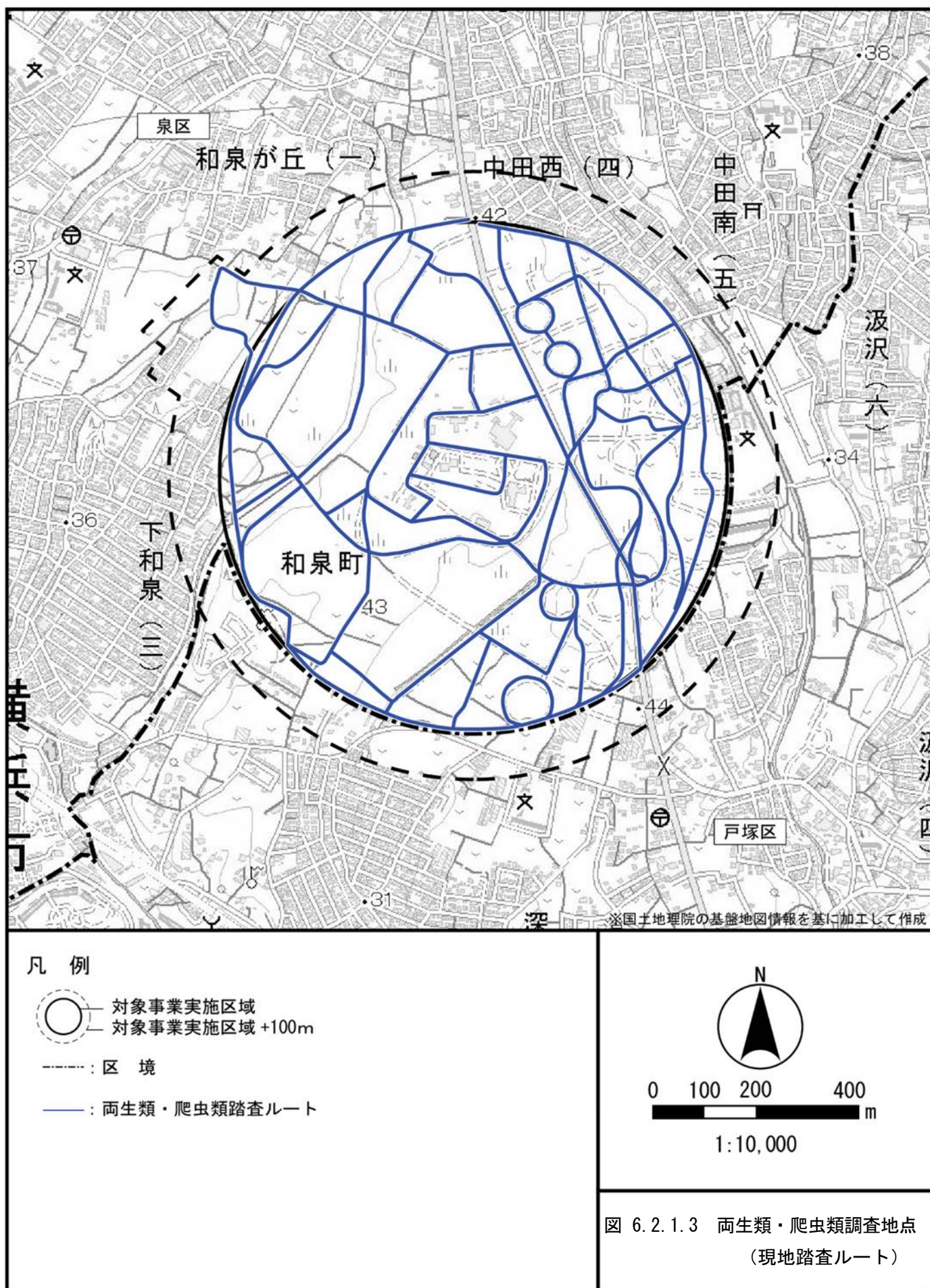


0 100 200 400 m

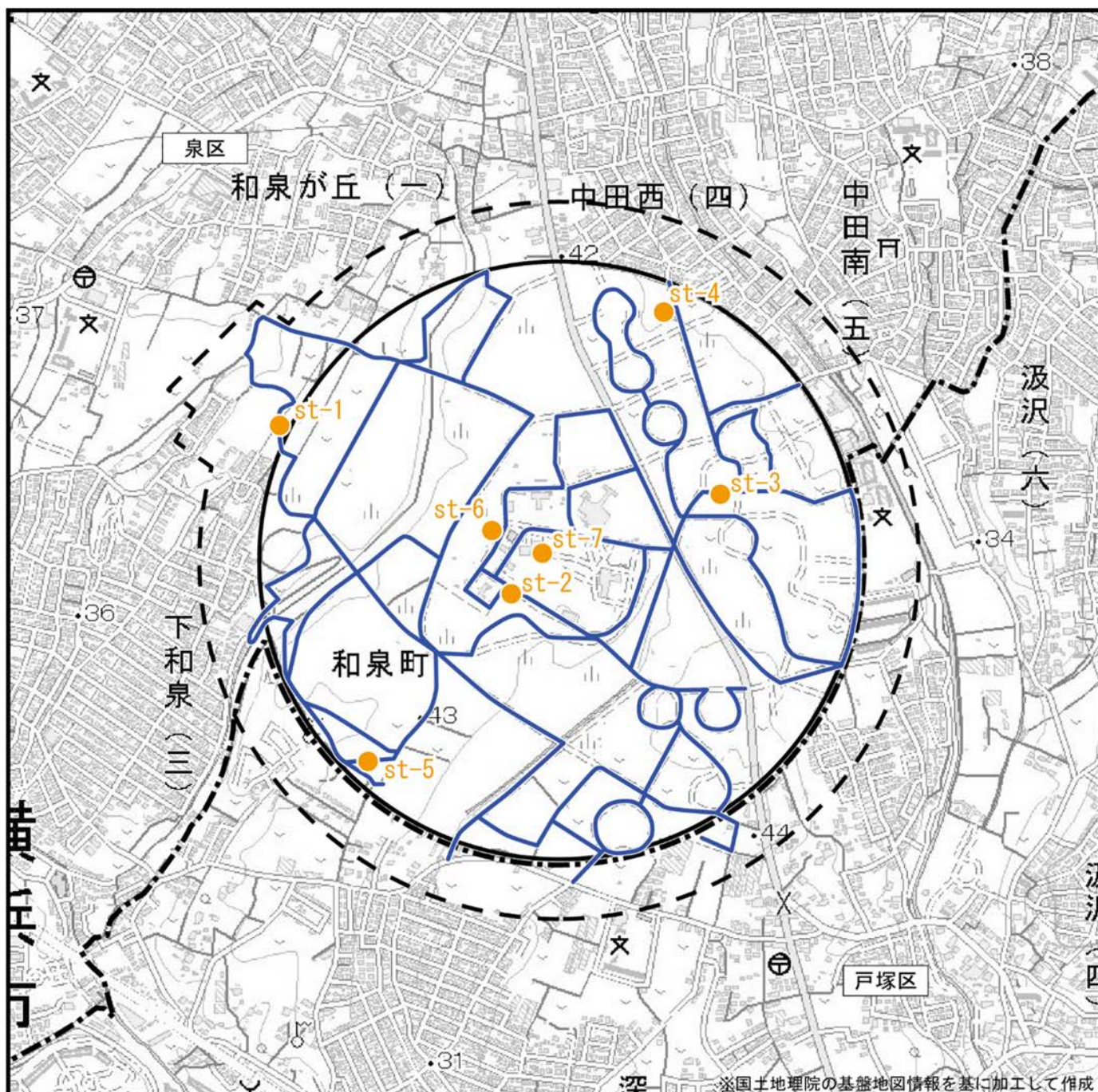
1:10,000

図 6.2.1.2 鳥類調査地点









### 凡 例



- - - : 区 境

— : 昆虫類踏査ルート

● : 昆虫類トラップ (ライトトラップ、ベイトトラップ)  
調査地点 (st-1 ~ st-7)

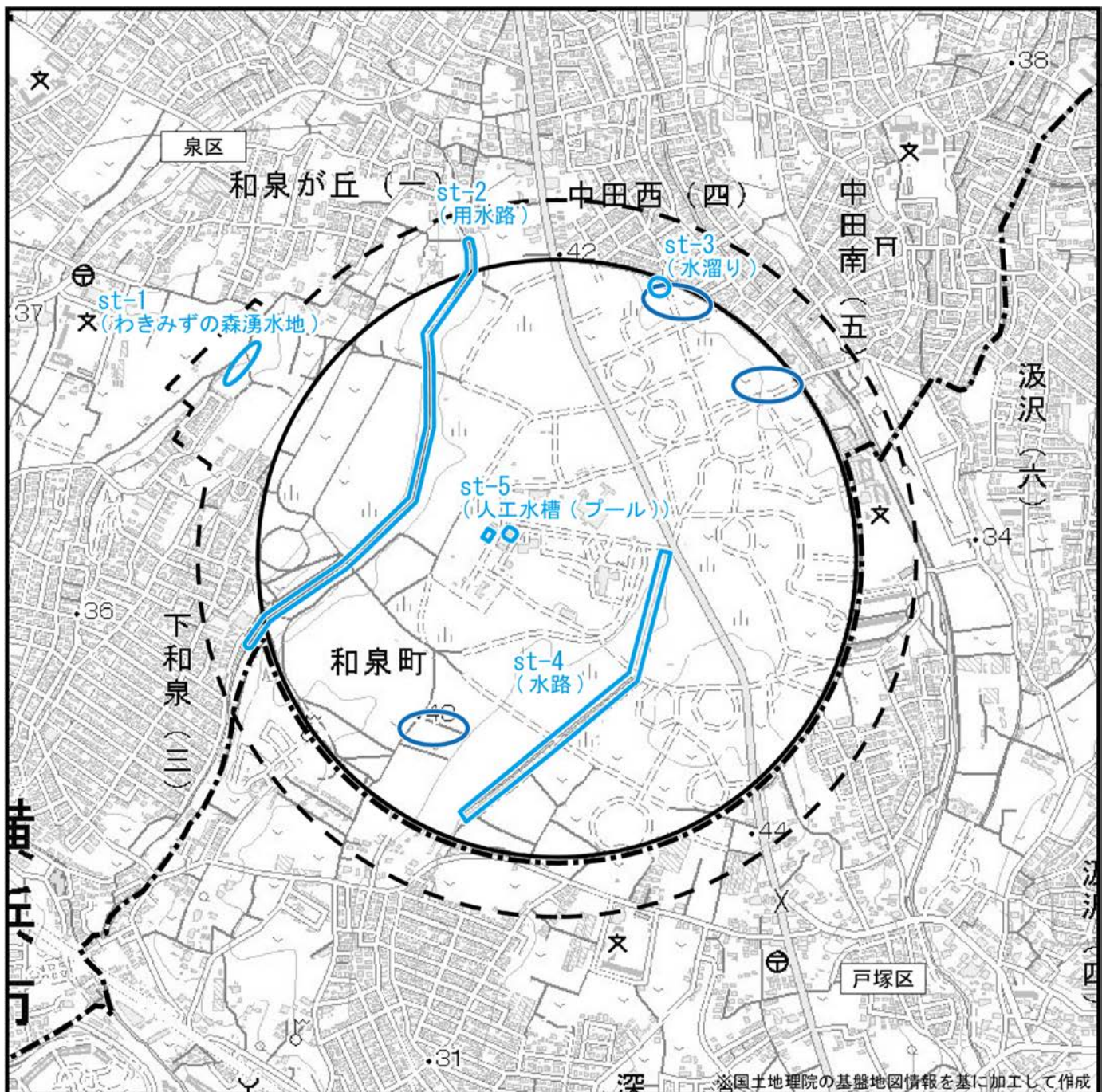


0 100 200 400  
m

1:10,000

図 6.2.1.4 昆虫類調査地点  
(現地踏査ルート及びトラップ調査位置)





### 凡 例

- 対象事業実施区域
- 対象事業実施区域 +100m
- : 区 境
- : 主要な水生生物調査位置 (st-1～st-5)
- : 湿地の位置

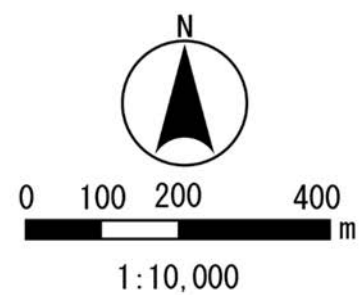


図 6.2.1.5 水生生物調査地点

### ③ 調査期間・時期

既存資料調査では、入手可能な近年の文献を整理しました。

現地調査実施日は、表 6.2.1.1 に示すとおりです。

哺乳類は、四季を通して活動している種が多いため、4 季調査を設定しました。鳥類は、繁殖期、渡りの時期及び越冬期を考慮して設定しました。両生類・爬虫類は、春から秋にかけての活動期と、早春に繁殖期を迎える種群があることを考慮して設定しました。昆虫類は、成虫で活動する種数の多い春、夏、秋の 3 季を設定しました。水生生物は、水生生物相の季節変化を考慮して、春季、夏季及び冬季に設定しました。

表 6.2.1.1 現地調査実施日

調査項目		調査季	現地調査実施日
動物	哺乳類	冬季	令和 2 年 2 月 18 日（火）
		春季	令和 2 年 4 月 30 日（木）～5 月 1 日（金）※ <sup>1</sup>
		夏季	令和 2 年 6 月 25 日（木）
		秋季	令和 2 年 10 月 19 日（月）～20 日（火）※ <sup>1</sup>
	鳥類（一般鳥類）	冬季	令和 2 年 2 月 17 日（月）
		春季	令和 2 年 4 月 30 日（木）
		夏季	令和 2 年 6 月 23 日（火）
		秋季	令和 2 年 10 月 19 日（月）
	両生類・爬虫類	春季	令和 2 年 5 月 1 日（木）
		夏季	令和 2 年 6 月 25 日（木）
		秋季	令和 2 年 10 月 19 日（月）
	昆虫類	春季	令和 2 年 4 月 30 日（木）～5 月 1 日（金）
		夏季	令和 2 年 6 月 23 日（火）～24 日（水）
		秋季	令和 2 年 10 月 19 日（月）～20 日（火）
		春季※ <sup>2</sup>	令和 4 年 5 月 9 日（月）～10 日（火）
		夏季※ <sup>2</sup>	令和 4 年 6 月 22 日（水）～23 日（木）
		秋季※ <sup>2</sup>	令和 4 年 10 月 20 日（木）～21 日（金）
	水生生物	冬季	令和 2 年 2 月 18 日（火）
		春季	令和 2 年 5 月 1 日（金）
		夏季	令和 2 年 6 月 25 日（木）

※<sup>1</sup> 哺乳類の調査では、有識者ヒアリングからの意見に基づき春季、秋季においてトラップ調査、夜間撮影も実施しました。

※<sup>2</sup> 令和 4 年の昆虫類調査は st-6、st-7 においてトラップ調査（ベイトトラップ、ライトトラップ）を実施したのみです。



#### ④ 調査方法

##### ア 動物の状況

動物の状況について、既存資料調査の方法は、表 6.2.1.2 に示す文献から、対象事業実施区域及びその周辺において生息記録のある注目すべき種、生息している可能性のある注目すべき種を整理しました。

現地調査の項目及び調査方法は、表 6.2.1.3 に示すとおりです。

表 6.2.1.2 既存資料

文献	対象データ
「神奈川県鳥獣生息分布調査報告書」 (神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課、平成 4 年 3 月)	戸塚区及び泉区のメッシュ分布図に記載がある哺乳類及び鳥類
「横浜の川と海の生物 (第 16 報・河川編)」 (横浜市環境科学研究所、令和 6 年 3 月)	境川水系の水生生物 (魚類及び底生動物)
「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」 (神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月)	戸塚区・泉区周辺で出現記録のある哺乳類、鳥類、両生・爬虫類、昆虫類、水生生物の中で生息の可能性のあるもの

表 6.2.1.3 調査方法 (現地調査)

調査項目	調査手法
哺乳類	対象事業実施区域及び周辺を任意に踏査し、目撃及びフィールドサイン(足跡、糞、食痕、巣、爪痕、掘り返し等の生息痕)により確認された哺乳類の種名、確認位置等を記録しました。また、有識者ヒアリングからの意見に基づき、春季、秋季についてはトラップ調査、夜間撮影も実施しました。 現地踏査ルート及びトラップ調査、夜間撮影の位置は図 6.2.1.1 (p.6.2-4) に示すとおりです。
鳥類	対象事業実施区域及び周辺において、センサスルートを設定したラインセンサス法及び眺望の良い箇所に定点を設定した定点観察法、任意踏査により周辺を観察し、記録する任意観察法を実施しました。 センサスルート及び定点位置は、図 6.2.1.2 (p.6.2-5) に示すとおりです。
両生類・爬虫類	対象事業実施区域及び周辺を任意に踏査し、目視又は鳴き声等による直接観察やタモ網等を用いた任意の採取により調査を実施しました。 現地踏査ルートは、図 6.2.1.3 (p.6.2-6) に示すとおりです。
昆虫類	対象事業実施区域及び周辺を任意に踏査し、目視又は鳴き声等による直接観察や捕虫網等による採取、トラップ(ライトトラップ、ベイトトラップ)調査を実施しました。 現地踏査ルート及びトラップ(ライトトラップ、ベイトトラップ)調査の位置は、図 6.2.1.4 (p.6.2-7) に示すとおりです。
水生生物	対象事業実施区域及び周辺を任意に踏査し、目視等直接観察で確認された種や、タモ網等を用いて調査地域内の底生動物を採取し、記録しました。 調査の位置は、図 6.2.1.5 (p.6.2-8) に示すとおりです。

#### イ 地形、地質の状況

地形、地質の状況について、地形図等の既存資料を収集・整理しました。

#### ウ 土壌の状況

土壌の状況について、土壌図等の既存資料を収集・整理しました。

#### エ 水質・底質の状況

水質・底質の状況について、公共用水域及び地下水の水質測定結果報告書等の既存資料を収集・整理しました。

#### オ 水循環の状況

水循環の状況について、河川の概要等の既存資料を収集・整理しました。

#### カ 土地利用の状況

土地利用の状況について、土地利用現況図等の既存資料を収集・整理しました。

#### キ 関係法令、計画等

関係法令、計画等について、内容を整理しました。整理した関係法令、計画等は以下に示すとおりです。

- ・「文化財保護法」
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」
- ・「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」
- ・「環境省レッドリスト 2020」
- ・「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」
- ・「横浜市環境管理計画」

## ⑤ 調査結果

### ア 動物の状況

#### (7) 既存資料調査

##### A) 動物相の状況

既存資料調査の結果は、表 6.2.1.4 に示すとおりです。

表 6.2.1.4 動物相の概況（既存資料調査）

分類*	既存資料			主な確認種
	①	②	③	
哺乳類	○	○		ノウサギ、カヤネズミ、タヌキ、ニホンイタチ、アナグマ
鳥類	○	○		コサギ、カルガモ、トビ、コジュケイ、ヤマドリ、キジ、コチドリ、タカブシギ、イソシギ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ツグミ、ウグイス、オオヨシキリ、セッカ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシブトガラス 等
両生類	○			ニホンアカガエル、トウキョウダルマガエル、ムカシツチガエル、シュレーゲルアオガエル
爬虫類	○			ニホンイシガメ、ヒガシニホントカゲ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ
魚類	○		○	キンブナ、ギンブナ、オイカワ、カワムツ、アブラハヤ、ウグイ、モツゴ、タモロコ、ヒガシシマドジョウ、ホトケドジョウ、ナマズ、アユ、カダヤシ、ブルーギル、カジカ、ボウズハゼ、カワヨシノボリ、オオヨシノボリ、トウヨシノボリ類、ウロハゼ 等
底生動物			○	アメリカツノウズムシ、カワニナ、ヒロマキミズマイマイ、シマイシビル、ビロウドイシビル、ミズムシ、フロリダマミズヨコエビ、ミナミテナガエビ、ヒラテテナガエビ、スジエビ、ウデマガリコカゲロウ、ハグロトンボ、ダビドサナエ、コオニヤンマ、シオカラトンボ、コガタシマトビケラ、ウルマーシマトビケラ 等
昆虫類	○			コバネアオイトトンボ、ベッコウトンボ、ババアメンボ、ホッケミズムシ、コオイムシ、ウラギンスジヒョウモン、オオウラギンヒョウモン、オオムラサキ、ツマグロキチョウ、セアカオサムシ、ヒトツメアオゴミムシ、オオサカアオゴミムシ、イグチケブカゴミムシ、ホソハンミョウ、オオミズスマシ、コガムシ、オオクワガタ、アカマダラハナムグリ 等

※ 分類は各資料に準拠しました。

資料①：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」（神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月）

資料②：「神奈川県鳥獣生息分布調査報告書」（神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課、平成 4 年 3 月）

資料③：「横浜の川と海の生物（第 16 報・河川編）」（横浜市環境科学研究所、令和 6 年 3 月）



## B) 注目すべき動物種及び生息地の状況

既存資料調査において確認された種（動物）について、表 6.2.1.5 の選定基準により注目すべき種及び生息地を選定しました。その結果、表 6.2.1.6～表 6.2.1.12 に示すとおり、哺乳類は 2 種、鳥類は 67 種、両生類は 4 種、爬虫類は 5 種、魚類は 12 種、昆虫類は 153 種、底生動物は 4 種が選定されました。

なお、注目すべき生息地は確認されていません。

表 6.2.1.5 注目すべき種の選定基準（動物）

No.	文献及び法律名	選定基準となる区分	記号
1	「文化財保護法」 (法律第 214 号、昭和 25 年)	特別天然記念物 天然記念物	国特 天然
2	「神奈川県文化財保護条例」 (神奈川県条例第 13 号、昭和 30 年)	県指定天然記念物	県天
3	「横浜市文化財保護条例」 (横浜市条例第 53 号、昭和 62 年)	市指定天然記念物	市天
4	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」 (法律第 75 号、平成 4 年)	国際希少野生動植物種 国内希少野生動植物種 緊急指定種	国際 国内 緊急
5	「環境省レッドリスト 2020」 (環境省、令和 2 年 3 月)	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA 類 絶滅危惧ⅠB 類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 情報不足	EX EW CR+EN CR EN VU NT DD
6	「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」 (神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月)	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA 類 絶滅危惧ⅠB 類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 減少種 希少種 要注意種 注目種 情報不足  不明種	EX EW CR+EN CR EN VU NT 減少 希少 要注意 注目 DD DDA DDB 不明

表 6.2.1.6 調査区域周辺で確認されている注目すべき種（哺乳類）

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
1	ネズミ目(齧歯目)	ネズミ科	カヤネズミ						NT
2	ネコ目(食肉目)	イタチ科	ニホンイタチ						NT
計	2 目	2 科	2 種	0 種	0 種	0 種	0 種	0 種	2 種

※1 選定基準及びランクは、表 6.2.1.5 のNo.と対応します。

※2 種名及び配列等は、主に「令和 6 年度 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

表 6.2.1.7 (1) 調査区域周辺で確認されている注目すべき種（鳥類）

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
1	キジ目	キジ科	ウズラ					VU	VU <sup>b</sup>
2			ヤマドリ						VU <sup>a, b</sup>
3	ハト目	ハト科	アオバト						注目 <sup>a, b</sup>
4	ペリカン目	サギ科	アマサギ						減少 <sup>a</sup>
5	ツル目	クイナ科	クイナ						VU <sup>b</sup>
6			ヒクイナ					NT	CR+EN <sup>a</sup>
7	カッコウ目	カッコウ科	カッコウ						VU <sup>a</sup>
8	アマツバメ目	アマツバメ科	ヒメアマツバメ						減少 <sup>a</sup>
9	チドリ目	チドリ科	タゲリ						VU <sup>b</sup>
10			ケリ					DD	希少 <sup>a</sup> NT <sup>b</sup>
11			ムナグロ						減少 <sup>b</sup>
12			イカルチドリ						NT <sup>a</sup> 注目 <sup>b</sup>
13			コチドリ						注目 <sup>a</sup>
14			シロチドリ					VU	VU <sup>a</sup> , NT <sup>b</sup>
15		シギ科	ヤマシギ						希少 <sup>b</sup>
16			オオジシギ					NT	EX <sup>a</sup>
17			タシギ						注目 <sup>b</sup>
18			ツルシギ					VU	NT <sup>b</sup>
19			コアオアシシギ						NT <sup>b</sup>
20			アオアシシギ						NT <sup>b</sup>
21			タカブシギ					VU	NT <sup>b</sup>
22			キアシシギ						VU <sup>b</sup>
23			イソシギ						希少 <sup>a</sup> 注目 <sup>b</sup>
24			ウズラシギ						NT <sup>b</sup>
25			ハマシギ					NT	VU <sup>b</sup>
26		タマシギ科	タマシギ					VU	CR+EN <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
27	チドリ目	カモメ科	コアシサシ					VU	CR+EN <sup>a</sup>

表 6.2.1.7 (2) 調査区域周辺で確認されている注目すべき種（鳥類）

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
28	タカ目	タカ科	ハチクマ					NT	CR+EN <sup>a</sup>
29			ツミ						VU <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
30			ハイタカ					NT	DD <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
31			オオタカ						VU <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
32			ノスリ						VU <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
33	フクロウ目	フクロウ科	オオコノハズク						CR+EN <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
34			アオバズク						VU <sup>a</sup>
35			トラフズク						CR+EN <sup>b</sup>
36			コミミズク						CR+EN <sup>tb</sup>
37	ブッポウソウ目	カワセミ科	ヤマセミ						希少 <sup>a</sup>
38	ハヤブサ目	ハヤブサ科	ハヤブサ				国内	VU	CR+EN <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
39	スズメ目	サンショウクイ科	サンショウクイ					VU	VU <sup>a</sup>
40		モズ科	チゴモズ					CR	CR+EN <sup>a</sup>
41			モズ						減少 <sup>a</sup>
42			アカモズ				国内	EN	CR+EN <sup>a</sup>
43		キクイタダキ科	キクイタダキ						希少 <sup>a</sup>
44		ヒバリ科	ヒバリ						減少 <sup>a</sup>
45		ツバメ科	ツバメ						減少 <sup>a</sup>
46		ムシクイ科	メボソムシクイ						VU <sup>a</sup>
47			エゾムシクイ						NT <sup>a</sup>
48			センダイムシクイ						NT <sup>a</sup>
49		ヨシキリ科	オオヨシキリ						VU <sup>a</sup>
50			コヨシキリ						CR+EN <sup>a</sup>
51		セッカ科	セッカ						減少 <sup>a, b</sup>
52		ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ						NT <sup>a</sup>
53		ヒタキ科	トラツグミ						減少 <sup>a</sup>
54			クロツグミ						VU <sup>a</sup>
55			アカハラ						減少 <sup>a</sup>
56			コルリ						VU <sup>a</sup>
57			ルリビタキ						VU <sup>a</sup>
58			コサメビタキ						CR+EN <sup>a</sup>
59			キビタキ						減少 <sup>a</sup>
60			オオルリ						NT <sup>a</sup>
61		セキレイ科	キセキレイ						減少 <sup>a</sup>
62			セグロセキレイ						減少 <sup>a</sup>
63			ビンズイ						VU <sup>a</sup>



表 6.2.1.7 (3) 調査区域周辺で確認されている注目すべき種（鳥類）

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
64	(スズメ目)	アトリ科	カワラヒワ						減少 <sup>a</sup>
65		ホオジロ科	アオジ						VU <sup>a</sup>
66			クロジ						CR+EN <sup>a</sup> 減少 <sup>b</sup>
67			オオジュリン						VU <sup>b</sup>
計	12 目	27 科	67 種	0 種	0 種	0 種	2 種	17 種	67 種

※1 選定基準及びランクは、表 6.2.1.5 のNo.と対応します。

※2 種名及び配列等は、主に「令和 6 年度 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

※3 「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」（神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月）において、鳥類は繁殖期または非繁殖期ごとにカテゴリーが設定されています。繁殖期及び非繁殖期の区分は以下のとおりです。

a：繁殖期 b：非繁殖期

表 6.2.1.8 調査区域周辺で確認されている注目すべき種（両生類）

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
1	無尾目	アカガエル科	ニホンアカガエル						VU
2			トウキョウダルマガエル					NT	VU
3			ムカシツチガエル※3						要注
4		アオガエル科	シュレーゲルアオガエル						要注
計	1 目	2 科	4 種	0 種	0 種	0 種	0 種	1 種	4 種

※1 選定基準及びランクは、表 6.2.1.5 のNo.と対応します。

※2 種名及び配列等は、主に「令和 6 年度 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

※3 資料③では、ツチガエルとして掲載されています。

表 6.2.1.9 調査区域周辺で確認されている主な注目すべき種（爬虫類）

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
1	カメ目	イシガメ科	ニホンイシガメ					NT	CR+EN
2	有鱗目	トカゲ科	ヒガシニホントカゲ※3						要注
3		ナミヘビ科	シマヘビ						要注
4			アオダイショウ						要注
5			ヤマカガシ						要注
計	2 目	3 科	5 種	0 種	0 種	0 種	0 種	1 種	5 種

※1 選定基準及びランクは、表 6.2.1.5 のNo.と対応します。

※2 種名及び配列等は、主に「令和 6 年度 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

※3 資料③では、トカゲとして掲載されています。

表 6.2.1.10 調査区域周辺で確認されている主な注目すべき種（魚類）

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
1	コイ目	コイ科	キンブナ					VU	EN
2			アブラハヤ						NT
3			ウグイ						NT
4		ドジョウ科	ヒガシシマドジョウ						NT
5		フクドジョウ科	ホトケドジョウ					EN	EN
6	ナマズ目	ナマズ科	ナマズ						注目
7	トゲウオ目	ヨウジウオ科	テングヨウジ						注目
8	スズキ目	カジカ科	カジカ					NT	VU
9		カワアナゴ科	カワアナゴ						EN
10		ハゼ科	ボウズハゼ						NT
11			オオヨシノボリ						NT
12			ウロハゼ						注目
計	4 目	8 科	12 種	0 種	0 種	0 種	0 種	3 種	12 種

※1 選定基準及びランクは、表 6.2.1.5 のNo.と対応します。

※2 種名及び配列等は、主に「令和 6 年度 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

表 6.2.1.11 (1) 調査区域周辺で確認されている主な注目すべき種（昆虫類）

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
1	トンボ目 (蜻蛉目)	アオイトトンボ科	ホソミオツネントンボ						要注
2			コバネアオイトトンボ					EN	EX
3			オツネントンボ						VU
4		イトトンボ科	キイトトンボ						EN
5			クロイトトンボ						要注
6			セスジイトトンボ						要注
7			オオイトトンボ						CR
8		カワトンボ科	ハグロトンボ						要注
9		ヤンマ科	コシボソヤンマ						要注
10			カトリヤンマ						NT
11			ミルンヤンマ						要注
12		サナエトンボ科	ヤマサナエ						要注
13			タイワンウチワヤンマ						DD
14		エゾトンボ科	トラフトンボ						EX
15			コヤマトンボ						NT
16			タカネトンボ						要注
17		トンボ科	コフキトンボ						要注
18			ベッコウトンボ				国内	CR	EX
19			ハラビロトンボ						要注
20			シオヤトンボ						要注
21			チョウトンボ						EN
22			ナツアカネ						要注

表 6.2.1.11 (2) 調査区域周辺で確認されている主な注目すべき種 (昆虫類)

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
23	トンボ目 (蜻蛉目)	(トンボ科)	マユタテアカネ						要注
24			ヒメアカネ						要注
25			ミヤマアカネ						NT
26			リスアカネ						要注
27	バッタ目 (直翅目)	クツワムシ科	クツワムシ						要注
28		キリギリス科	オナガササキリ						要注
29			ヒガシキリギリス						要注
30		ケラ科	ケラ						要注
31		マツムシ科	スズムシ						要注
32			マツムシ						要注
33		バッタ科	ショウリョウバッタモドキ						要注
34		イナゴ科	セグロイナゴ						NT
35	カメムシ目 (半翅目)	アメンボ科	オオアメンボ						NT
36			ババアメンボ					NT	EN
37		ミズムシ科(昆)	ホッケミズムシ					NT	EX
38		コオイムシ科	コオイムシ					NT	EN
39	トビケラ目 (毛翅目)	エグリトビケラ科	スジトビケラ						DDA
40		トビケラ科	ツマグロトビケラ						DDA
41	チョウ目 (鱗翅目)	ミノガ科	オオミノガ						VU
42		セセリチョウ科	アオバセセリ本土亜種						要注
43			ホソバセセリ						VU
44			ギンイチモンジセセリ					NT	NT
45			ミヤマチャバネセセリ						要注
46			オオチャバネセセリ						VU
47		シジミチョウ科	ミドリシジミ						NT
48		タテハチョウ科	コムラサキ						EN
49			ウラギンスジヒョウモン					VU	EN
50			オオウラギンスジヒョウモン						NT
51			スミナガシ本土亜種						要注
52			ウラギンヒョウモン						VU
53			オオウラギンヒョウモン					CR	EX
54			アサマイチモンジ						VU
55			クモガタヒョウモン						EN
56			オオムラサキ					NT	NT
57		シロチョウ科	ツマグロキチョウ					EN	EX
58		シャクガ科	ヨホシナミシャク						DDA
59			オビコバネナミシャク						不明
60		ヒトリガ科	ベニゴマダラヒトリ						不明
61	ハエ目 (双翅目)	ミバエ科	ツマモンハススジハマダラミバエ						注目
62	コウチュウ目 (鞘翅目)	オサムシ科	アシミゾヒメヒラタゴミムシ						NT
63			ムネミゾチビゴモクムシ						EX
64			フタモンクビナガゴミムシ						DDB
65			クロズカタキバゴミムシ						NT

表 6.2.1.11 (3) 調査区域周辺で確認されている主な注目すべき種 (昆虫類)

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※ <sup>1</sup>					
				1	2	3	4	5	6
66	(コウチュウ目 (鞘翅目))	(オサムシ科)	ヨツモンカタキバゴミムシ						NT
67			アオヘリミズギワゴミムシ						NT
68			フタボシチビゴミムシ						NT
69			アカガネオサムシ本州亜種					VU	EX
70			セアカオサムシ					NT	要注
71			アカガネアオゴミムシ						NT
72			ヒトツメアオゴミムシ					NT	EX
73			コアトワアオゴミムシ						NT
74			オオサカアオゴミムシ					DD	CR+EN
75			キバナガミズギワゴミムシ						NT
76			クロヒメヒョウタンゴミムシ						NT
77			オオアオホソゴミムシ						CR+EN
78			コチビヒョウタンゴミムシ						NT
79			チョウセンゴモクムシ					VU	NT
80			アリスアトキリゴミムシ					DD	要注
81			モモグロジュウジアトキリ ゴミムシ						DDA
82			ナカグロキバネクビナガゴ ミムシ						VU
83			ヨツボシゴミムシ						NT
84			トカラコミズギワゴミムシ						DDB
85			クロサヒラタアトキリゴミ ムシ						要注
86			イグチケブカゴミムシ					NT	NT
87			クロケブカゴミムシ						NT
88			ヒロムネナガゴミムシ						NT
89			オオナガゴミムシ						NT
90			コホソナガゴミムシ						NT
91			オオキンナガゴミムシ						NT
92			アシミゾナガゴミムシ						NT
93			セグロマメゴモクムシ						NT
94			クロサマメゴモクムシ						NT
95			タオマメゴモクムシ						NT
96			キアシツヤヒラタゴミムシ						NT
97			オビモンコミズギワゴミムシ						NT
98			アトモンコミズギワゴミム シ本土亜種						NT
99			クビナガヨツボシゴミムシ					DD	VU
100			アトスジチビゴミムシ						VU
101			キュウシュウツヤゴモクムシ						NT
102		ハンミョウ科	ホソハンミョウ					VU	CR+EN
103		ミズスマシ科	オオミズスマシ					NT	CR
104		カワラゴミムシ科	カワラゴミムシ						VU

表 6.2.1.11 (4) 調査区域周辺で確認されている主な注目すべき種 (昆虫類)

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※ <sup>1</sup>					
				1	2	3	4	5	6
105	(コウチュウ目 (鞘翅目))	ガムシ科	ウスグロヒラタガムシ						DDB
106			コガムシ					DD	NT
107			ガムシ					NT	CR
108			クナシリシジミガムシ						DDB
109		エンマムシ科	ルリエンマムシ						VU
110		ムネアカセンチコ ガネ科	ムネアカセンチコガネ						NT
111		クワガタムシ科	オオクワガタ					VU	CR+EN
112			ヒラタクワガタ本土亜種						VU
113			ミヤマクワガタ						要注
114		アカマダラセンチ コガネ科	アカマダラセンチコガネ						NT
115		コガネムシ科	アカマダラハナムグリ					DD	NT
116			ヤマトエンマコガネ					NT	DDA
117			マルエンマコガネ						CR+EN
118			シロスジコガネ						VU
119			ヒゲコガネ						VU
120			シラホシハナムグリ						EX
121			クロスジチャイロコガネ本 州・四国亜種						不明
122			ルイスチャイロコガネ						DDA
123		タマムシ科	ウバタマムシ						NT
124			タマムシ						要注
125		コメツキムシ科	ウバタマコメツキ						NT
126		ホタル科	ヘイケボタル						NT
127			スジグロボタル						NT
128		ツチハンミョウ科	マメハンミョウ						要注
129		カミキリムシ科	ヒゲナガモモブトカミキリ						NT
130			ルリカミキリ						VU
131			シロスジカミキリ						要注
132			アカネトラカミキリ						NT
133			ハンノキカミキリ						VU
134			アカアシオオアオカミキリ						CR+EN
135			ミドリカミキリ						NT
136			クロトラカミキリ						VU
137			ベーツヒラタカミキリ						VU
138			キイロトラカミキリ						要注
139			ナカバヤシモモブトカミキリ						VU
140			ムネアカクロハナカミキリ						NT
141			ネジロカミキリ						NT
142			ヨツボシカミキリ					EN	CR+EN
143			アサカミキリ					VU	CR+EN
144			モモグロハナカミキリ						NT
145			トラフカミキリ						要注



表 6.2.1.11 (5) 調査区域周辺で確認されている主な注目すべき種（昆虫類）

No.	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
				1	2	3	4	5	6
146	(コウチュウ目 (鞘翅目))	(カミキリムシ科)	ブドウトラカミキリ						NT
147			アオスジカミキリ						VU
148		ゾウムシ科	オオゴボウゾウムシ						EX
149	ハチ目 (膜翅目)	コマユバチ科	ウマノオバチ					NT	VU
150		ヒメバチ科	コンボウアメバチ						VU
151		クモバチ科	キオビクモバチ						CR+EN
152			フタモンクモバチ					NT	VU
153		ドロバチモドキ科	ニッポンハナダカバチ					VU	VU
計	8 目	46 科	153 種	0 種	0 種	0 種	1 種	30 種	153 種

※1 選定基準及びランクは、表 6.2.1.5 のNo.と対応します。

※2 種名及び配列等は、主に「令和 6 年度 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

表 6.2.1.12 調査区域周辺で確認されている主な注目すべき種（底生動物）

No.	門名	綱名	目名	科名	和名	選定基準及びランク※1					
						1	2	3	4	5	6
1	軟体動物門	二枚貝綱	マルスダレガイ目	シジミ科	マシジミ					VU	
2	節足動物門	昆虫綱	トンボ目 (蜻蛉目)	カワトンボ科	ハグロトンボ						要注
3				ヤンマ科	コシボソヤンマ						要注
4				エゾトンボ科	コヤマトンボ						NT
計	2 門	2 綱	2 目	4 科	4 種	0 種	0 種	0 種	0 種	1 種	3 種

※1 選定基準及びランクは、表 6.2.1.5 のNo.と対応します。

※2 種名及び配列等は、主に「令和 6 年度 河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

## (イ) 現地調査

### A) 動物相の確認状況

#### (a) 哺乳類

現地調査で確認された哺乳類は、表 6.2.1.13 に示すとおり、3 目 6 科 6 種が確認されました。

市街地から山林まで様々な環境に生息するアズマモグラ、クリハラリス、アカネズミ、アライグマ、タヌキ、ハクビシンが確認されました。

なお、クリハラリス、アライグマは特定外来生物に指定されています。

表 6.2.1.13 確認種（哺乳類）

No.	目名	科名	種名	調査時期			
				冬季	春季	夏季	秋季
1	モグラ目（食虫目）	モグラ科	アズマモグラ	○	○	○	○
2	ネズミ目（齧歯目）	リス科	クリハラリス	○	○	○	○
3		ネズミ科	アカネズミ				○
4	ネコ目（食肉目）	アライグマ科	アライグマ	○	○	○	
5		イヌ科	タヌキ	○	○	○	○
6		ジャコウネコ科	ハクビシン		○		
合計 3 目 6 科 6 種				4 種	5 種	4 種	4 種

※ 種名及び配列は、「令和 6 年度河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

#### (b) 鳥類

現地調査で確認された鳥類は、表 6.2.1.14 に示すとおり、10 目 28 科 54 種が確認されました。

確認種は耕作地や市街地周辺に生息するキジやスズメ、ムクドリ、ハシブトガラス等を中心に、草地性の種であるヒバリやホオジロ等、樹林性の種であるコゲラやシジュウカラ等が四季を通じて確認されました。また、水辺の種であるカワウ、アオサギ、ダイサギは、全て上空通過であり、カルガモのみ中央部の水路を一時的に利用する様子が確認されました。

全 54 種のうち、冬季調査で確認されたタシギ、ツグミ、ジョウビタキ、タヒバリ、シメ、ホオアカ、カシラダカ、アオジは冬鳥であり、春季～夏季調査で確認されたコチドリ、ツバメ、イワツバメは夏鳥です。また、夏鳥に関しては春季調査で確認されたエゾムシクイ、キビタキや秋季調査で確認されたコサメビタキ、サメビタキ、ノビタキによる渡り途中の一時的な飛来が確認されました。

なお、調査計画立案段階で実施された有識者ヒアリング意見を踏まえ、表 6.2.1.14 (1)～(2) には冬季調査結果として鳥類調査の定点観察中に確認された鳥類（猛禽類）も追加しました。

表 6.2.1.14 (1) 確認種 (鳥類)

No.	目名	科名	種名	調査時期			
				冬季	春季	夏季	秋季
1	キジ目	キジ科	コジュケイ	○	○	○	
2			キジ	○	○	○	○
3	カモ目	カモ科	カルガモ	○		○	
4	ハト目	ハト科	カワラバト (ドバト)	○	○		○
5			キジバト	○	○	○	○
6	カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○		
7	ペリカン目	サギ科	アオサギ	○	○	○	○
8			ダイサギ		○		○
9	チドリ目	チドリ科	コチドリ		○	○	
10		シギ科	タシギ	○			
11	タカ目	タカ科	トビ	○			
12			ツミ	○			
13			ハイタカ	○			
14			オオタカ	○	○		○
15			ノスリ	○			
16	キツツキ目	キツツキ科	コゲラ	○	○	○	○
17			アオゲラ				○
18	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	○	○		○
19			ハヤブサ	○			
20	スズメ目	モズ科	モズ	○	○	○	○
21		カラス科	オナガ		○	○	○
22			ハシボソガラス	○	○	○	○
23			ハシブトガラス	○	○	○	○
24		シジュウカラ科	ヤマガラ	○			
25			シジュウカラ	○	○	○	○
26		ヒバリ科	ヒバリ	○	○	○	○
27		ツバメ科	ツバメ		○	○	
28			イワツバメ			○	
29		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○	○
30		ウグイス科	ウグイス	○	○	○	
31		エナガ科	エナガ	○	○		○
32		ムシクイ科	エゾムシクイ		○		
33		チメドリ科	ガビチョウ		○	○	
34		メジロ科	メジロ	○	○		
35		セッカ科	セッカ		○	○	
36		ムクドリ科	ハッカチョウ		○		
37			ムクドリ	○	○	○	○
38		ヒタキ科	ツグミ	○	○		
39			ジョウビタキ	○			
40			ノビタキ				○
41			イソヒヨドリ		○		
42			サメビタキ				○
43			コサメビタキ				○

表 6.2.1.14 (2) 確認種 (鳥類)

No.	目名	科名	種名	調査時期			
				冬季	春季	夏季	秋季
44	(スズメ目)	ヒタキ科	キビタキ		○		
45		スズメ科	スズメ	○	○	○	○
46		セキレイ科	キセキレイ				○
47			ハクセキレイ	○	○		○
48			タヒバリ	○			
49		アトリ科	カワラヒワ	○	○	○	○
50			シメ	○			
51		ホオジロ科	ホオジロ	○	○	○	○
52			ホオアカ	○			
53			カシラダカ	○			
54			アオジ	○			
合計 10 目 28 科 54 種				38 種	34 種	23 種	26 種

※ 種名及び配列は、「令和 6 年度河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(国土交通省、令和 6 年 10 月)に準拠しました。

### (c) 両生類・爬虫類

現地調査で確認された両生類・爬虫類は、表 6.2.1.15 に示すとおり、2 目 5 科 5 種が確認されました。

現地調査により、わきみずの森の水路や池ではアズマヒキガエル、落葉広葉樹林～低茎草地ではニホンアマガエル、ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ、歩道の街灯下ではニホンヤモリが確認されました。

表 6.2.1.15 確認種 (両生類・爬虫類)

No.	目名	科名	種名	調査時期		
				春季	夏季	秋季
1	無尾目	ヒキガエル科	アズマヒキガエル	○		
2		アマガエル科	ニホンアマガエル	○	○	
3	有鱗目	ヤモリ科	ニホンヤモリ		○	○
4		トカゲ科	ヒガシニホントカゲ	○	○	○
5		カナヘビ科	ニホンカナヘビ	○	○	○
合計 2 目 5 科 5 種				4 種	4 種	3 種

※ 種名及び配列は、「令和 6 年度河川水辺の国勢調査のための生物リスト」(国土交通省、令和 6 年 10 月)に準拠しました。



#### (d) 昆虫類

現地調査で確認された昆虫類は、表 6.2.1.16 に示すとおり、14 目 160 科 642 種が確認されました。

確認種は、ケラやハラオカメコオロギ、エンマコオロギ等のバッタ類やダイミョウセセリやムラサキシジミ、ウラギンシジミ、ベニシジミ、キタキチョウ等のチョウ類といった草地環境に生息する種が主に確認されました。

また、対象事業実施区域に点在する樹林等の環境及びその周辺部では、コクワガタ、カナブン等の樹林性の種やアオバハゴロモやコガシラアワフキ、クロモンサシガメ等の林縁～草地環境に生息する種が確認されており、わきみずの森ではシマアメンボのような水辺・水域に生息する種が確認されており、生息環境に応じた多様な種の生息が確認されました。

表 6.2.1.16 確認種（昆虫類）

目名	科数	種数	主な確認種
カゲロウ目（蜉蝣目）	1	1	ヒメカゲロウ科の一種
アミメカゲロウ目（脈翅目）	1	1	アミメクサカゲロウ
トンボ目（蜻蛉目）	4	10	アジアイトトンボ、クロスジギンヤンマ、コシアキトンボ、コノシメトンボ、アキアカネ 等
ゴキブリ目（網翅目）	1	2	モリチャバネゴキブリ、ヒメクロゴキブリ
カマキリ目（螳螂目）	1	3	ハラビロカマキリ、コカマキリ、オオカマキリ
ハサミムシ目（革翅目）	2	3	ヒゲジロハサミムシ、ハマベハサミムシ、オオハサミムシ
バッタ目（直翅目）	13	35	ケラ、ハラオカメコオロギ、エンマコオロギ、カネタタキ、クサヒバリ、ヒナバッタ、ショウリョウバッタモドキ、イボバッタ、コバネイナゴ 等
カメムシ目（半翅目）	30	100	アオバハゴロモ、コガシラアワフキ、クロモンサシガメ、イネホソミドリカスミカメ、オオモンシロナガカメムシ、コバネヒョウタンナガカメムシ、ツチカメムシ、キマダラカメムシ、シマアメンボ 等
シリアゲムシ目（長翅目）	1	1	ヤマトシリアゲ
トビケラ目（毛翅目）	1	1	ウルマーシマトビケラ
チョウ目（鱗翅目）	20	108	ダイミョウセセリ、イチモンジセセリ、チャバネセセリ、ムラサキシジミ、ウラギンシジミ、ベニシジミ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、キタテハ、アカタテハ、アオスジアゲハ、ナガサキアゲハ、キタキチョウ 等
ハエ目（双翅目）	25	51	メスアカケバエ、アメリカミズアブ、オオイシアブ、マダラアシナガバエ、キゴシハナアブ、オオハナアブ 等
コウチュウ目（鞘翅目）	43	252	トウキョウヒメハンミョウ、オオヒラタシデムシ、コクワガタ、セマダラコガネ、カナブン、セボシジョウカイ、ヒロオビジョウカイモドキ、ヒメスナゴミムシダマシ、ウリハムシ、
ハチ目（膜翅目）	17	74	スギナハバチ、クロヤマアリ、クロクサアリ、トビイロケアリ、アズマオオズアリ、アミメアリ、コガタスズメバチ、オオスズメバチ、キイロスズメバチ 等
14 目	160 科	642 種	-

# (e) 水生生物

現地調査で確認された水生生物は、表 6.2.1.17 (1) ～ (3) に示すとおり、17 目 34 科 60 種が確認されました。

確認種は、止水域を中心に生息するギンヤンマやマツモムシ、コマツモムシ等が多く確認されたほか、一部流水域では、サワガニやオナシカワゲラ属、シロハラコカゲロウ、ヤブヤンマやオニヤンマ等の流水環境に生息する種が確認されました。これらの種は主にわきみずの森で確認されたほか、対象事業実施区域北東から東側に見られる湿地環境で確認されました。

また、外来種として「河川水辺の国勢調査 特定外来生物等リスト」の国外外来種（国土交通省、令和 6 年 10 月）に指定されているアメリカツノウズムシやサカマキガイ、シナヌマエビ、「指定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）の条件付特定外来生物に指定されているアメリカザリガニが確認されました。

本調査では、魚類の生息は確認されていません。

表 6.2.1.17 (1) 確認種（水生生物）

No.	目名	科名	種名	調査時期			備考
				冬季	夏季	春季	
1	三岐腸目	サンカクアタマウズムシ科	ナミウズムシ			○	
2			アメリカツノウズムシ			○	外来種(国外)
3	新生腹足目	カワニナ科	カワニナ	○	○	○	
4		カワザンショウガイ科	ウスイロオカチグサガイ		○		
5	汎有肺目	モノアラガイ科	モノアラガイ		○	○	
6		サカマキガイ科	サカマキガイ	○		○	外来種(国外)
7	オヨギミミズ目	オヨギミミズ科	オヨギミミズ科の一種		○		
8	イトミミズ目	ミズミミズ科	ユリミミズ		○		
ー			ミズミミズ科の一種		●	○	
9	ツリミミズ目	フトミミズ科	フトミミズ科の一種		○	○	
10	吻無蛭目	イシビル科	シマイシビル	○	○	○	
ー			イシビル科の一種		●	●	
11	ヨコエビ目	ハマトビムシ科	ニホンオカトビムシ			○	
12	ワラジムシ目	ミズムシ科（甲）	ミズムシ（甲）	○	○	○	
13	エビ目	ヌマエビ科	シナヌマエビ		○	○	外来種(国外)
ー			カワリヌマエビ属の一種	○	●	●	
14		アメリカザリガニ科	アメリカザリガニ	○	○	○	条件付特定外来生物
15		サワガニ科	サワガニ	○	○	○	
16	カゲロウ目（蜉蝣目）	コカゲロウ科	シロハラコカゲロウ		○	○	
17			フタバカゲロウ	○			
18			タマリフタバカゲロウ	○			
ー			フタバカゲロウ属の一種		○	○	
19			ウスイロフトヒゲコカゲロウ		○	○	
20	トンボ目（蜻蛉目）	アオイトトンボ科	オオアオイトトンボ		○	○	
21		イトトンボ科	アオモンイトトンボ	○			
ー			アオモンイトトンボ属の一種		○		
22			クロイトトンボ属の一種			○	
23		ヤンマ科	ギンヤンマ	○	○	○	

表 6.2.1.17 (2) 確認種 (水生生物)

No.	目名	科名	種名	調査時期			備考
				冬季	夏季	春季	
—	(トンボ目 (蜻蛉目))	(ヤンマ科)	ギンヤンマ属の一種			●	
24			ヤブヤンマ		○		
25		オニヤンマ科	オニヤンマ		○	○	
26		トンボ科	ショウジョウトンボ			○	
27			シオカラトンボ	○	○		
28			オオシオカラトンボ	○	○	○	
29			コシアキトンボ			○	
30			アカネ属の一種			○	
31	カワゲラ目 (セキ翅目)	オナシカワゲラ科	オナシカワゲラ属の一種	○	○	○	
32	カメムシ目 (半翅目)	アメンボ科	アメンボ		○	○	
33			コセアカアメンボ		○	○	
34			ヤスマツアメンボ		○	○	
35			シマアメンボ		○	○	
—			アメンボ科の一種		●		
36		カタビロアメンボ科	ケシカタビロアメンボ属の一種		○	○	
37		ミズムシ科 (昆)	アサヒナコミズムシ	○			
38		マツモムシ科	コマツモムシ	○	○	○	
39			マツモムシ	○	○	○	
40	トビケラ目 (毛翅目)	ムネカクトビケラ科	ムネカクトビケラ属の一種		○	○	
41		コエグリトビケラ科	コエグリトビケラ属の一種		○		
42		カクツツトビケラ科	カクツツトビケラ属の一種		○	○	
43	ハエ目 (双翅目)	ヒメガガンボ科	ヒゲナガガガンボ属の一種		○	○	
44		ガガンボ科	ガガンボ属の一種			○	
45		ユスリカ科	ダンドラヒメユスリカ属の一種			○	
46			セスジユスリカ	○			
—			ユスリカ属の一種		○	○	
47			ホソミユスリカ属の一種		○		
48			ボカシヌマユスリカ属の一種			○	
49			ツヤムネユスリカ属の一種		○		
50			ハモンユスリカ属の一種		○	○	
51			ヒメエリユスリカ属の一種		○		
52			クロバヌマユスリカ属の一種		○	○	

表 6.2.1.17 (3) 確認種（水生生物）

No.	目名	科名	種名	調査時期			備考
				春季	夏季	秋季	
53	(ハエ目 (双翅目) )	(ユスリカ科)	アシマダラユスリカ属の一種			○	
54			カスリモンユスリカ属の一種		○		
55			ヒゲユスリカ属の一種		○		
56			エリユスリカ亜科の一種	○			
—			ユスリカ亜科の一種	○			
—			ユスリカ科の一種		●	●	
57		ホソカ科	ニッポンホソカ		○	○	
58			ホソカ科の一種	○			
59		ブユ科	ツノマユブユ属の一種		○		
60	コウチュウ目 (鞘翅目)	ゲンゴロウ科	ハイイロゲンゴロウ	○	○		
合計 17 目 34 科 60 種				22 種	44 種	43 種	—

※1 ●は同時期に同属の種が確認されたため種数にカウントしていません。

※2 種名及び配列は、「令和 6 年度河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

※3 外来種(国外)は「河川水辺の国勢調査 特定外来生物等リスト」に掲載された国外外来種（国土交通省、令和 6 年 10 月）。

※4 条件付特定外来生物は「指定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）指定の条件付特定外来生物。



## B) 注目すべき動物種及び生息地の状況

現地調査において確認された種（動物）について、表 6.2.1.18 の選定基準により注目すべき種及び生息地を選定しました。その結果を表 6.2.1.19、表 6.2.1.21、表 6.2.1.23 及び表 6.2.1.25 に、確認状況は表 6.2.1.20、表 6.2.1.22、表 6.2.1.24 及び表 6.2.1.26 に、確認位置を図 6.2.1.6～図 6.2.1.9 に示します。なお、オオタカについては種の保護に配慮して、図面の掲載を控えました。

対象事業実施区域及びその周辺において、注目すべき動物種として鳥類は 18 種、両生類 1 種、爬虫類 1 種、昆虫類 4 種及び水生生物 2 種が現地調査で確認され、哺乳類については、注目すべき種は確認されていません。

表 6.2.1.18 注目すべき種の選定基準（動物）

No.	文献及び法律名	選定基準となる区分	記号
1	「文化財保護法」 (法律第 214 号、昭和 25 年)	特別天然記念物 天然記念物	国特 天然
2	「神奈川県文化財保護条例」 (神奈川県条例第 13 号、昭和 30 年)	県指定天然記念物	県天
3	「横浜市文化財保護条例」 (横浜市条例第 53 号、昭和 62 年)	市指定天然記念物	市天
4	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」 (法律第 75 号、平成 4 年)	国際希少野生動植物種 国内希少野生動植物種 緊急指定種	国際 国内 緊急
5	「環境省レッドリスト 2020」 (環境省、令和 2 年 3 月)	絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類 絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 情報不足 絶滅のおそれのある地域個体群	EX EW CR+EN CR EN VU NT DD LP
6	「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」 (神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月)	絶滅 準絶滅 野生絶滅 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類 絶滅危惧ⅠB類 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧 減少種 希少種 要注意種 注目種 情報不足  不明種	EX  EW CR+EN CR EN VU NT 減少 希少 要注意 注目 DD DDA DDB 不明

表 6.2.1.19 注目すべき種（鳥類）

No.	目名	科名	種名	調査時期				選定基準及びランク					
				冬季	春季	夏季	秋季	1	2	3	4	5	6
1	チドリ目	チドリ科	コチドリ		○	○							注目 <sup>a</sup>
2		シギ科	タシギ	○									注目 <sup>b</sup>
3	タカ目	タカ科	ツミ	○									VU <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
4			ハイタカ	○								NT	DD <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
5			オオタカ	○	○		○					NT	VU <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
6			ノスリ	○									VU <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
7	ハヤブサ目	ハヤブサ科	ハヤブサ	○							国内	VU	CR+EN <sup>a</sup> 希少 <sup>b</sup>
8	スズメ目	モズ科	モズ	○	○	○	○						減少 <sup>a</sup>
9		ヒバリ科	ヒバリ	○	○	○	○						減少 <sup>a</sup>
10		ツバメ科	ツバメ		○	○							減少 <sup>a</sup>
11		ムシクイ科	エゾムシクイ		○								NT <sup>a</sup>
12		セッカ科	セッカ		○	○							減少 <sup>a, b</sup>
13		ヒタキ科	コサメビタキ				○						CR+EN <sup>a</sup>
14			キビタキ		○								減少 <sup>a</sup>
15		セキレイ科	キセキレイ				○						減少 <sup>a</sup>
16		アトリ科	カワラヒワ	○	○	○	○						減少 <sup>a</sup>
17		ホオジロ科	ホオアカ	○									CR+EN <sup>a</sup>
18			アオジ	○									VU <sup>a</sup>
合計 4 目 13 科 18 種				11 種	9 種	6 種	6 種	0 種	0 種	0 種	1 種	3 種	18 種

※1 選定基準及びランクは表 6.2.1.18 の No. と対応します。

※2 種名及び配列は、「令和 6 年度河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

※3 「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」（神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月）において、鳥類は繁殖期または非繁殖期ごとにカテゴリーが設定されています。繁殖期及び非繁殖期の区分は以下のとおりです。

a：繁殖期 b：非繁殖期

表 6.2.1.20 (1) 注目すべき種の生態及び確認状況（鳥類）

種名	生態及び確認状況
コチドリ	<p>本種は、主に夏鳥として渡来しますが、冬季の記録もあります。河川中流から下流にかけての河川敷に生息します。特に植物のまばらな砂礫地に好んで営巣しますが、造成直後の裸地や駐車場等を代替環境として利用することもあります。巣は軽く地面を窪ませて、小石や木片、葉等を敷く簡単なもので、繁殖期は4～7月です。</p> <p>現地調査では、春季に対象事業実施区域周辺の耕作地で春季に1個体、夏季に1個体が確認されました。</p> <p>なお、対象事業実施区域及びその周辺での営巣は確認されていません。</p>
タシギ	<p>本種は、神奈川県内には冬鳥として渡来するシギの仲間で、水の枯れない湿地環境に生息しています。</p> <p>現地調査では、冬季に対象事業実施区域内の草地で2個体が確認されました。</p> <p>なお、現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。</p>
ツミ	<p>本種は、留鳥の猛禽類で、主に山地の樹林等に生息し、都市公園や人家の庭等でも繁殖することが知られます。クロマツ等の高木に営巣し、普通3～5卵を産卵します。</p> <p>重要な種の保護の観点から、非表示としております。</p>
ハイタカ	<p>本種は、冬鳥の猛禽類で、神奈川県内では、個体数は少ないものの山地で繁殖している可能性もあるとされています。山地から丘陵地の森林に生息し、高木に営巣して普通4～5卵を産卵します。</p> <p>現地調査では、冬季に対象事業実施区域内の上空での飛翔が3例確認されました。</p> <p>なお、対象事業実施区域及びその周辺において繁殖兆候等は確認されていません。</p>
オオタカ	<p>本種は、留鳥の猛禽類で、山麓から丘陵地の森林に生息し、主に中・小型の鳥類を捕食します。スギやマツ類等の針葉樹の高木に生息することが多く、普通3～4卵を産卵します。</p> <p>重要な種の保護の観点から、非表示としております。</p>
ノスリ	<p>本種は、留鳥または漂鳥の猛禽類で、繁殖期には森林で営巣するものの、採餌には畑等の開けた環境をよく利用します。巣は樹上に作られ、普通2～3個の卵を産卵します。神奈川県内の繁殖記録は稀です。</p> <p>現地調査では、冬季に対象事業実施区域周辺上空での飛翔が1例確認されました。</p> <p>なお、対象事業実施区域及びその周辺において繁殖兆候等は確認されていません。</p>
ハヤブサ	<p>本種は、留鳥または冬鳥として渡来する猛禽類で、主に断崖のある海岸に生息しています。</p> <p>営巣も同様の環境で行い、普通3～4卵を産卵します。神奈川県内での繁殖は稀です。</p> <p>重要な種の保護の観点から、非表示としております。</p>
モズ	<p>本種は、留鳥として、県内全域で見られます。低地の林、河原、農耕地、公園等で単独で生活し、昆虫類等を摂餌して、はやにえをつくる習性があります。市街化により、緑地や草地が減少したために生息環境が狭められています。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の高茎草地や林縁で冬季に5個体、春季に4個体、夏季に4個体、秋季に8個体が確認されました。</p> <p>対象事業実施区域内及び周辺において営巣している可能性が高いです。</p>
ヒバリ	<p>本種は、留鳥として、広い草地のある河川敷や農耕地等に生息しています。背の低い草本が優占し、ところどころ地面が露出程度のまばらな乾いた草原を特に好み、イネ科等の植物の株際の地上、あるいは株内の低い位置に巣を作ることが知られています。広い農耕地や、主として背の低い草本が生息する草原の減少により生息地が減少しています。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の草地（低茎が優占）で冬季に4個体、春季に7個体、夏季に5個体、秋季に13個体が確認されました。</p> <p>対象事業実施区域内及び周辺において営巣している可能性が高いです。</p>

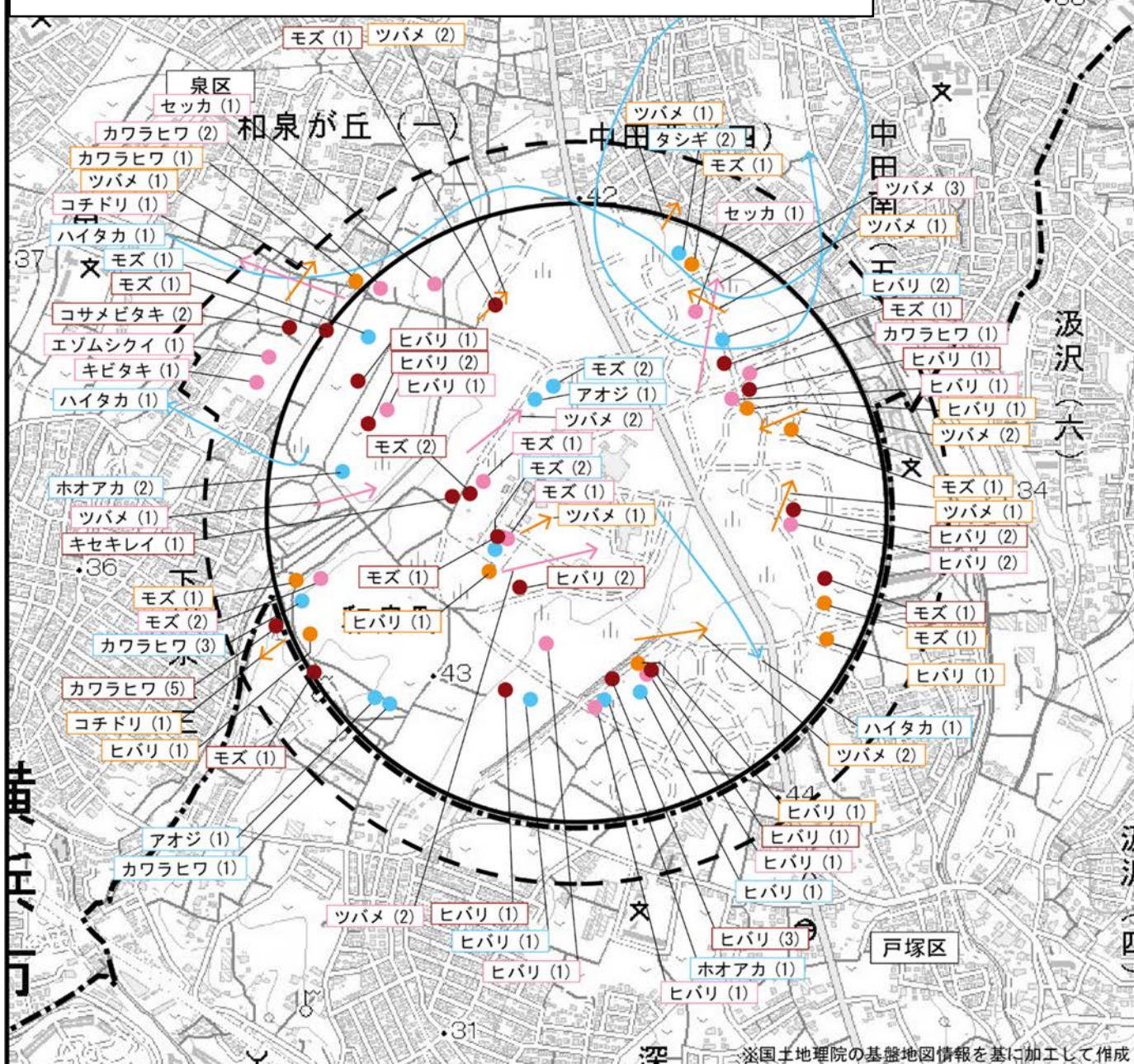
表 6.2.1.20 (2) 注目すべき種の生態及び確認状況（鳥類）

種名	生態及び確認状況
ツバメ	<p>本種は、夏鳥として県内全域の集落、都市に渡来します。繁殖は人間の居住空間と密接に結びつき、人間が出入りする建物の軒下に、泥や草を唾液で固めた碗型の巣を造ります。高層の建物であっても、巣の位置は人間の行動圏に接した低い場所に限られます。飛びながら飛翔昆虫を捕らえます。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の広範囲で春季に 8 個体、夏季に 11 個体が確認されました。</p> <p>なお、対象事業実施区域内及び周辺での営巣は確認されていません。</p>
エゾムシクイ	<p>本種は、夏鳥として低山から亜高山帯にかけての広葉樹林に生息します。傾斜が急で崖がある山を好みます。樹上生活が主であるが、梢近くよりも、低い下枝にとまることが多いです。崖のくぼみや穴の奥に主に蘚類を材料にして横に出入口のある球形の巣を造ります。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域外の樹林等の中で春季に 1 個体が確認されました。</p> <p>なお、現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。</p>
セッカ	<p>本種は、留鳥として河原や水田周辺の草原に生息します。電線にとまったり、草の間をくぐったり、地上を歩きながら餌を採ります。草の茎や葉の間に巣を造ります。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の高茎草地や低茎草地で春季に 2 個体、夏季に 8 個体が確認されました。</p> <p>対象事業実施区域内及び周辺において営巣している可能性が高いです。</p>
コサメビタキ	<p>本種は、夏鳥として渡来し、山地から丘陵地にかけての明るい林で繁殖します。秋の渡りの季節には、丘陵地や市街地の公園で観察されます。枝先から飛んでいる昆虫をねらい捕らえます。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域外の樹林等の中で秋季に 2 個体が確認されました。</p> <p>なお、現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。</p>
キビタキ	<p>本種は、夏鳥として山地から丘陵地のよく茂った落葉広葉樹林に渡来します。枝から枝に渡り採食することが多いです。繁殖は落葉広葉樹、針広混交林で行われ、巣は茂みの中や枝のまた、樹洞を利用して造ります。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域外の樹林等の中で春季に 1 個体が確認されました。</p> <p>なお、現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。</p>
キセキレイ	<p>本種は、留鳥または漂鳥として、平地から山地の川岸、湖沼、水田、農耕地に生息します。常に尾を上下に振りながら、主に水辺を歩き、水生昆虫等を捕食します。また、水辺の石や流木にとまり、飛ぶ虫に向かってフライングキャッチ等も行います。人家の屋根や橋桁、樹木等にお碗型の巣を造ります。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の草地で秋季に 1 個体が確認されました。</p> <p>なお、現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。</p>
カワラヒワ	<p>本種は、留鳥としてほぼ全域に生息しますが、繁殖記録は平野部に多く山間部にはほとんど確認されません。市街、村落、道路付近等の林や独立樹等に営巣し、巣は 3～7m の高さの枝上にあります。雑木林や農耕地の減少により、個体数が減少しています。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の樹林等や草地等で冬季に 4 個体、春季に 3 個体、夏季に 1 個体、秋季に 5 個体が確認されました。</p> <p>対象事業実施区域内及び周辺において営巣している可能性が高いです。</p>
ホオアカ	<p>本種は、おもに冬鳥として渡来し、河原や農耕地、草地に生息します。繁殖は、草原や灌木の散在する草原でおこないます。地上をはね歩き、草の実を採食します。県内では、人為的な開発の影響で河原や、休耕田、草地が減少し、生息地が減少しています。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の比較的高茎の草地や灌木上で冬季に 3 個体が確認されました。</p> <p>なお、現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。</p>
アオジ	<p>本種は、開けた森林や林縁に生息する種で、植物の種子や昆虫類を食べ、地表や低木の樹上に営巣します。繁殖期には平地から低山の雑木林や農耕地、河川敷の草やぶ、人家の庭等でもみられます。県内では箱根で繁殖例が記録されています。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の高茎草地や林縁で冬季に 2 個体が確認されました。</p> <p>なお、現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。</p>

資料：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」（神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月）



重要な種の保護の観点から、一部の種の確認位置を非表示としております。



※国土地理院の基盤地図情報を基に加工して作成

### 凡 例

- 対象事業実施区域
- 対象事業実施区域 +100m
- : 区 境
- : 注目すべき種確認位置  
(数字は確認個体数)
- : 注目すべき種確認位置 (飛翔軌跡)  
(数字は確認個体数)
- : 冬季
- : 春季
- : 夏季
- : 秋季

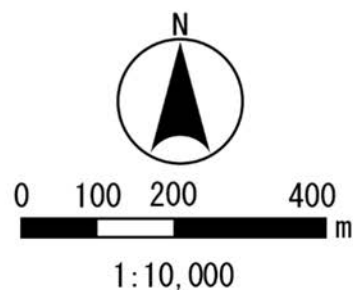


図 6.2.1.6 注目すべき種 (鳥類) の確認位置図

表 6.2.1.21 注目すべき種（両生類・爬虫類）

No.	目名	科名	種名	調査時期			選定基準及びランク					
				春季	夏季	秋季	1	2	3	4	5	6
1	無尾目	ヒキガエル科	アズマヒキガエル	○								要注意
2	有隣目	トカゲ科	ヒガシニホントカゲ	○	○	○						要注意
合計 2 目 2 科 2 種				2 種	1 種	1 種	0 種	0 種	0 種	0 種	0 種	2 種

※1 選定基準及びランクは表 6.2.1.18 の No. と対応します。

※2 種名及び配列は、「令和 6 年度河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

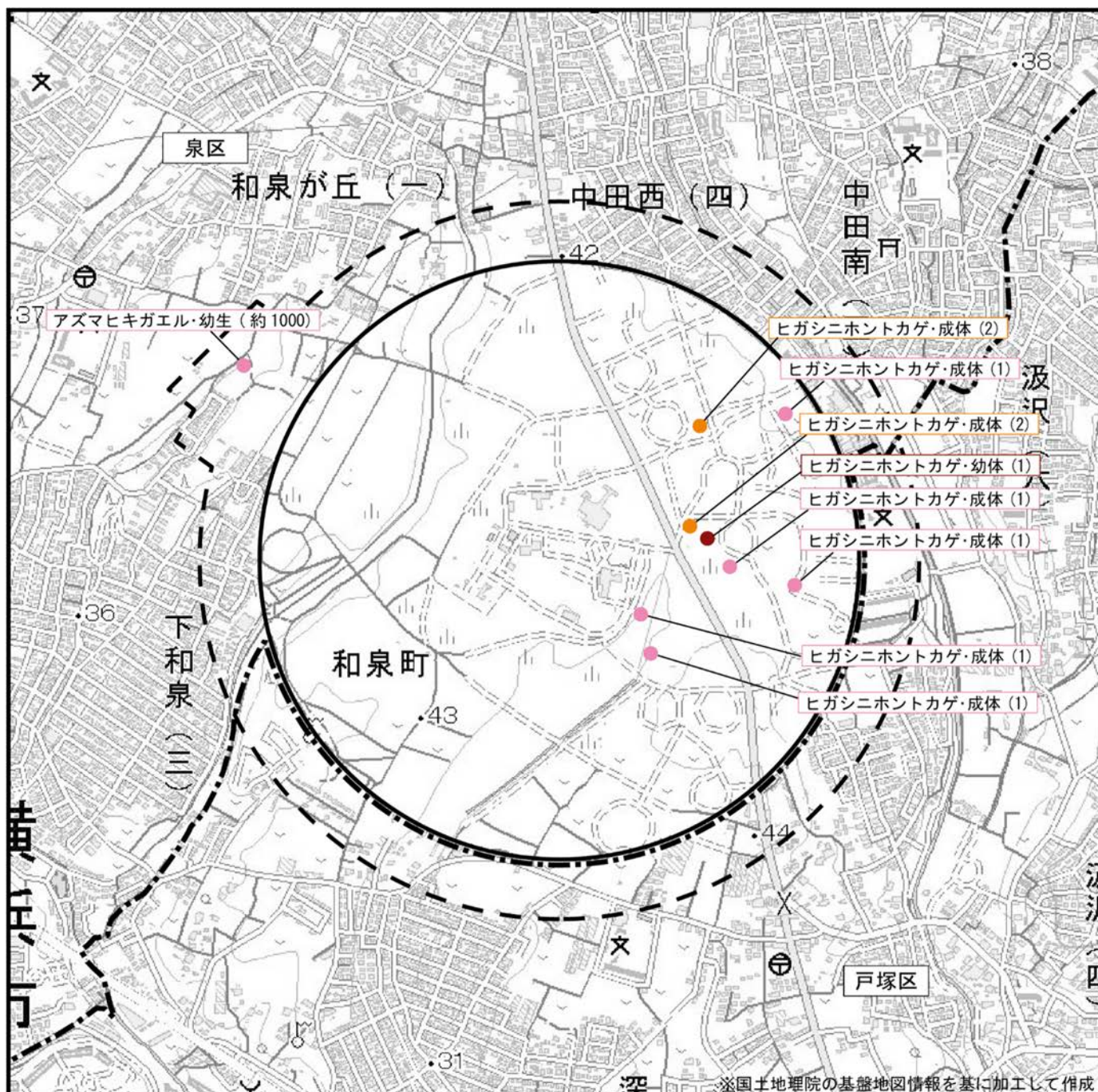
※3 ヒガシニホントカゲは、「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」ではトカゲとして記載されています。

表 6.2.1.22 注目すべき種の生態及び確認状況（両生類・爬虫類）

種名	生態及び確認状況
アズマヒキガエル	<p>本種は、平地から山地までの林床に広範囲に生息し、社寺や人家の庭にも住み着いています。早春の産卵期には、多数の個体が産卵場所に集まって集団産卵をします。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域外の水路や池で春季に 1000 個体以上の幼生が確認されました。</p> <p>対象事業実施区域の周辺で繁殖しています。</p>
ヒガシニホントカゲ	<p>本種は、日当たりの良い石や石垣の隙間、土手の斜面の穴等に生息し、ミズやクモ、昆虫等を捕食します。幼体の尾は鮮やかなコバルトブルーだが、この色は成長と共に消えます。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域及びその周辺の高茎草地や瓦礫の下等で、春季に 5 個体の成体、夏季に 4 個体の成体、秋季に 1 個体の幼体を確認されました。</p> <p>対象事業実施区域及びその周辺で繁殖しています。</p>

資料：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」（神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月）





### 凡 例



-----: 区 境

● : 注目すべき種 (両生類・爬虫類) 確認位置  
(数字は確認個体数)

● : 春季  
● : 夏季  
● : 秋季



0 100 200 400 m

1:10,000

図 6.2.1.7 注目すべき種 (両生類・爬虫類) の確認位置図

表 6.2.1.23 注目すべき種（昆虫類）

No.	目名	科名	種名	調査時期			選定基準及びランク					
				春季	夏季	秋季	1	2	3	4	5	6
1	バッタ目 (直翅目)	ケラ科	ケラ	○		○						要注意
2		バッタ科	ショウリョウバ ッタモドキ			○						要注意
3	コウチュウ目 (鞘翅目)	カミキリムシ科	トゲヒゲトビイ ロカミキリ		○							希少
4	ハチ目 (膜翅目)	スズメバチ科	ヤマトアシナガ バチ	○							DD	VU
合計 3 目 4 科 4 種				2 種	1 種	2 種	0 種	0 種	0 種	0 種	1 種	4 種

※1 選定基準及びランクは表 6.2.1.18 の No. と対応します。

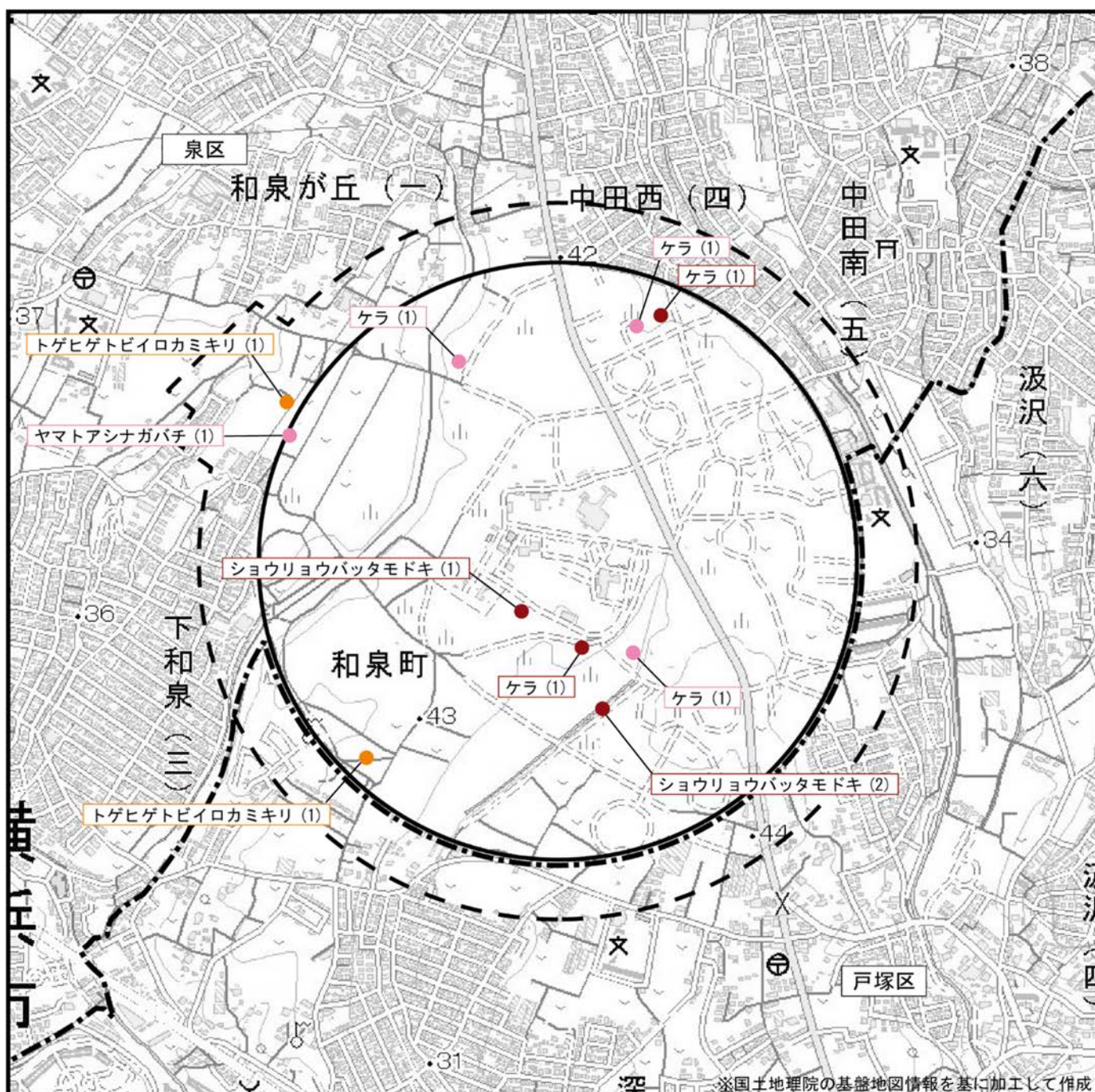
※2 種名及び配列は、「令和 6 年度河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

表 6.2.1.24 注目すべき種の生態及び確認状況（昆虫類）

種名	生態及び確認状況
ケラ	<p>本種は、湿地に穴を掘ってすむ種で、水田付近に多く、円筒型の体形、細かい毛の密生、前足の発達等穴居に適した形態を備えています。雄はブーという単調な声で鳴きます。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の低茎草地で春季に 3 個体、秋季に 2 個体が確認されました。</p>
ショウリョウバッタモドキ	<p>本種は、丘陵地のチガヤ等の茂る土堤に見られ、葉の裏に身を伏せるようにとまっているので見つかりにくいです。飛ぶことはほとんどありません。年 1 回秋に成虫が出現します。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の高茎草地で秋季に 3 個体が確認されました。</p>
トゲヒゲトビイロカミキリ	<p>本種は、ヤブニッケイかタブノキ(クスノキ科)を寄主植物とし、県内では横須賀市や三浦市等、一部地域が生息地として知られているのみです。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内外の樹林等で夏季に 2 個体が確認されました。</p>
ヤマトアシナガバチ	<p>本種は、県内では三浦半島の数カ所のみが生息地として知られているのみです。</p> <p>現地調査では、対象事業実施区域内の疎林で春季に 1 個体が確認されました。</p>

資料：「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」（神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月）





# 凡 例



-----: 区 境

● : 注目すべき種（昆虫類）確認位置  
（数字は確認個体数）

● : 春季  
● : 夏季  
● : 秋季

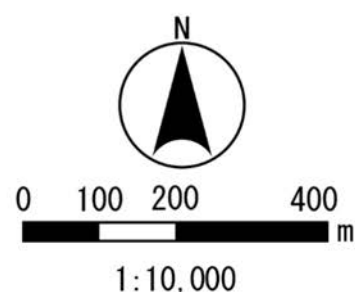


図 6.2.1.8 注目すべき種（昆虫類）  
の確認位置図

表 6.2.1.25 注目すべき種（水生生物）

No.	目名	科名	種名	調査時期			選定基準及びランク					
				冬季	春季	夏季	1	2	3	4	5	6
1	汎有肺目	モノアラガイ科	モノアラガイ		○	○					NT	
2	カメムシ目 (半翅目)	ミズムシ科	アサヒナコミズムシ	○								DD*
合計 2 目 2 科 2 種				1 種	1 種	1 種	0 種	0 種	0 種	0 種	1 種	1 種

※1 選定基準及びランクは表 6.2.1.18 の No. と対応します。

※2 種名及び配列は、「令和 6 年度河川水辺の国勢調査のための生物リスト」（国土交通省、令和 6 年 10 月）に準拠しました。

※3 神奈川県レッドデータブックでは「コミズムシ類」として掲載。

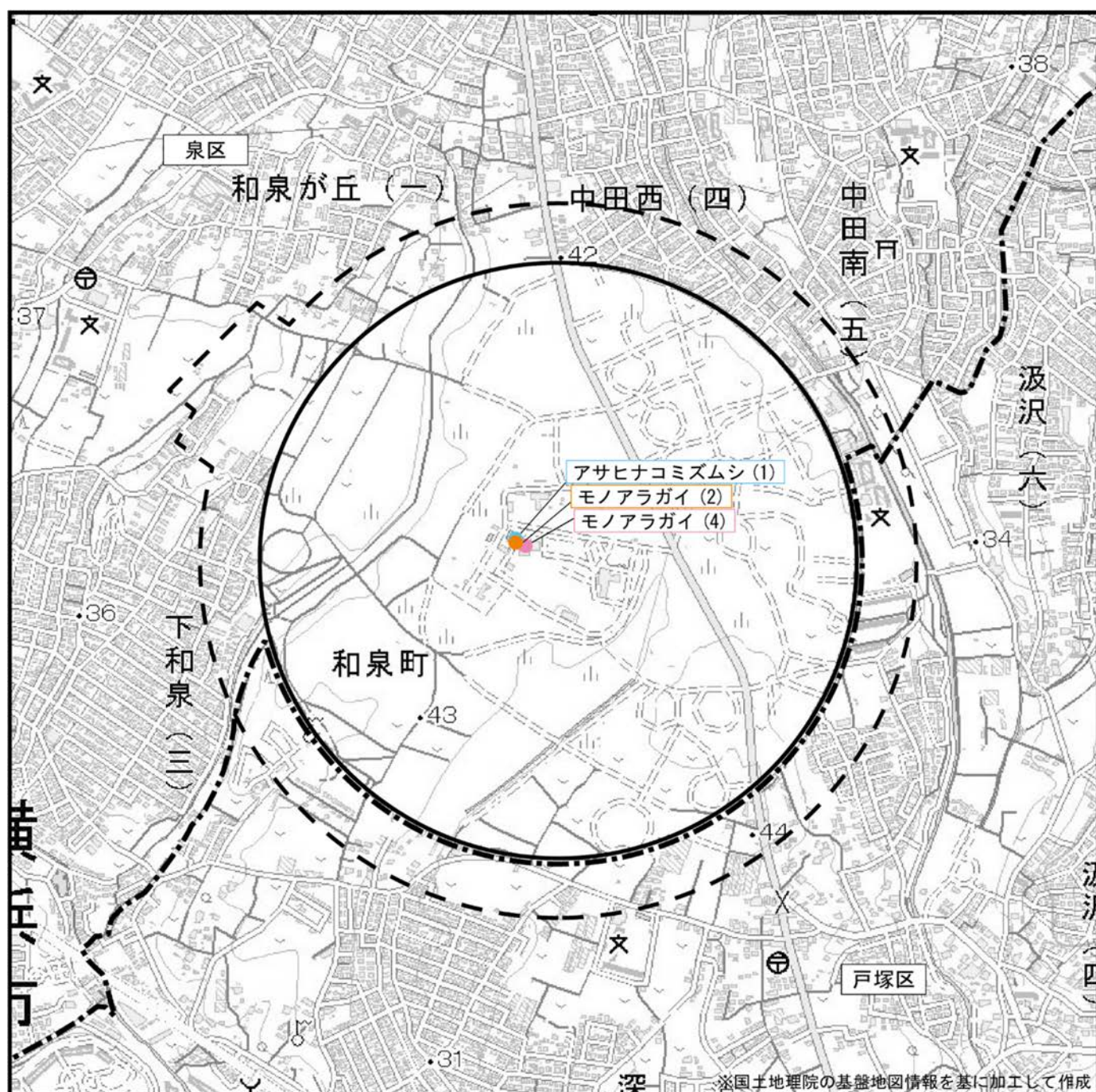
表 6.2.1.26 注目すべき種の生態及び確認状況（水生生物）

種名	生態及び確認状況
モノアラガイ	<p>本種は、日本全国に分布し、田んぼや細流、池沼等に多産していましたが、近年は急激に見られなくなりました。ゼラチン質の卵囊を水草や落ち葉に産み付けます。</p> <p>本種は、現地調査では、対象事業実施区域内の囲障区域内に設置された人工水槽（プール）で春季に 4 個体、夏季に 2 個体が確認されました。</p>
アサヒナコミズムシ	<p>本種は、止水域に生息し、平野部に池沼や水田に見られます。生活史の詳細は不明となっています。</p> <p>本種は、現地調査では、対象事業実施区域内の囲障区域内に設置された人工水槽（プール）で冬季に 1 個体が確認されました。</p>

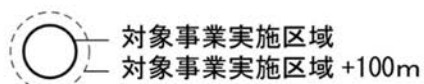
資料：「田んぼの生き物図鑑 増補改訂新版」（内山りゅう、平成 25 年 2 月）

「日本の水生昆虫」（中島淳、石田和男他、令和 2 年 1 月）





# 凡 例



----- : 区 境

● : 注目すべき種（水生生物）確認位置  
（数字は確認個体数）

● : 冬季  
● : 春季  
● : 夏季



0 100 200 400  
m

1:10,000

図 6.2.1.9 注目すべき種（水生生物）  
の確認位置図

## イ 地形、地質の状況

「第3章 3.2.2 地形、地質、地盤の状況」(p. 3-3～p. 3-8)に示したとおり、対象事業実施区域の地形は、大部分に武蔵野段丘面群があり、一部に一般斜面、谷底平野、平坦化地、山麓緩斜面、山頂緩斜面が分布しています。

なお、調査区域には「日本の地形レッドデータブック第1集(新装版)-危機にある地形-」(小泉武栄・青木賢人編、2000年12月)、「日本の地形レッドデータブック第2集-保存すべき地形-」(小泉武栄・青木賢人編、2002年3月)の保存すべき地形はありません。

表層地質図によると、事業実施区域の地質は、火山灰・礫及び砂/武蔵野ローム層・武蔵野礫層で形成されています。

## ウ 土壌の状況

「第3章 3.2.2 地形、地質、地盤の状況」(p. 3-9～p. P3-12)及び「第6章 6.7 土壌」(p. 6.7-4～p. 6.7-14)に示したとおりです。

対象事業実施区域の土壌は、大部分に厚層多腐植質黒ボク土があり、一部にその他の人工改変低地土があります。また、対象事業実施区域の地盤は、大部分に丘陵地及び台地面があり、一部に軟弱地盤層厚0～5mがあります。

## エ 水質、底質の状況

「第3章 3.2.10 公害等の状況」(p. 3-84～p. 3-87)及び「第6章 6.6 水質・底質」(p. 6.6-12～p. 6.6-33)に示したとおりです。

令和元年度から令和5年度の河川の水質測定結果の経年変化をみると、境川(高鎌橋)において、水素イオン濃度指数、生物化学的酸素要求量、浮遊物質質量及び溶存酸素量は、環境基準に適合しています。地下水の水質は、令和元年度から令和5年度の測定結果において環境基準に不適合の地点は確認されていません。

## オ 水循環の状況

「第3章 3.2.3 水循環の状況」(p. 3-13～p. 3-16)及び「第6章 6.3 水循環」(p. 6.3-6～p. 6.3-13)に示したとおりです。

対象事業実施区域の西側には二級河川の境川と和泉川が、東側には二級河川の宇田川があります。なお、湧水は泉区で3地点、戸塚区で2地点あります。

## カ 土地利用の状況

「第3章 3.2.6 土地利用の状況」(p. 3-47～p. 3-48)に示したとおり、対象事業実施区域の用途地域は、市街化調整区域となっています。

対象事業実施区域周辺は主に住居系の用途地域となっており、第1種低層住居専用地域、第1種中高層住居専用地域、第2種中高層住居専用地域、第1種住居地域、市街化調整区域に指定されています。

## キ 関係法令、計画等

### (7) 「文化財保護法」(法律第 214 号、昭和 25 年 5 月)

この法律は、文化財を「有形文化財」、「無形文化財」、「民俗文化財」、「記念物」、「文化的景観」及び「伝統的建造物群」と定義し、それらの文化財のうち、重要なものを国が指定・選定・登録し、重点的に保護しています。

このうち「記念物」とは、以下の文化財の総称を示しています。

1. 貝塚、古墳、都城跡、城跡旧宅等の遺跡で我が国にとって歴史上または学術上価値の高いもの
2. 庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳等の名勝地で我が国にとって芸術上または鑑賞上価値の高いもの
3. 動物、植物及び地質鉱物で我が国にとって学術上価値の高いもの

国は、これらの記念物のうち重要なものをこの種類に従って、「史跡」、「名勝」、「天然記念物」に指定し、これらの保護を図っています。そのうち特に重要なものについては、それぞれ「特別史跡」、「特別名勝」、「特別天然記念物」に指定しています。

### (イ) 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」

(法律第 75 号、平成 4 年 6 月)

この法律は、国内外の絶滅のおそれのある野生生物の種を保存するために施行されました。国内に生息・生育する、または、外国産の希少な野生生物を保全するために必要な措置を定めています。

国内に生息・生育する希少野生生物については、レッドリストに掲載されている絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ類、Ⅱ類）のうち、人為の影響により生息・生育状況に支障をきたしているものの中から、国内希少野生動植物種を指定し、個体の取り扱い規制、生息地の保護、保護増殖事業の実施等、保全のために必要な措置を講じています。

### (ウ) 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」

(法律第 78 号、平成 16 年)

この法律は、特定外来生物の飼養、輸入等について必要な規制を行うとともに、野外等に存する特定外来生物の防除を行うこと等により、特定外来生物による生態系、人の生命若しくは身体又は農林水産業に係る被害を防止することを目的とするものです。

特定外来生物とは、海外から導入されることにより、その本来の生息地又は生育地の外に存することとなる生物であり、生態系等に係る被害を及ぼし、または及ぼすおそれのある外来生物として政令で指定された種です。

(エ) 「環境省レッドリスト 2020」((環境省自然環境局、令和2年3月)

環境省では、日本に生息する野生生物について、生物学的な観点から個々の種の絶滅の危険度を評価し、レッドリストとしてまとめています。また、環境省のレッドリストでは、種毎に絶滅のおそれの程度に応じて、以下のとおりカテゴリー分けをして評価しています。

＜絶滅のおそれのある種のカテゴリー（ランク）＞

- ・絶滅（EX）：我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
- ・野生絶滅（EW）：飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
- ・絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）：絶滅の危機に瀕している種
- ・絶滅危惧ⅠA類（CR）：ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
- ・絶滅危惧ⅠB類（EN）：ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
- ・絶滅危惧Ⅱ類（VU）：絶滅の危険が増大している種
- ・準絶滅危惧（NT）：現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
- ・情報不足（DD）：評価するだけの情報が不足している種
- ・絶滅のおそれのある地域個体群（LP）：地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの

(オ) 「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」

(神奈川県立生命の星・地球博物館、平成18年7月)

本報告書は、神奈川県から絶滅した種や絶滅の危機に瀕している種のリストや、その集計結果を確認することができる報告書です。神奈川県レッドデータにおけるランクは以下に示すとおりです。

＜神奈川県レッドデータのランク＞

- ・絶滅（EX）：すでに絶滅したと考えられる種
- ・野生絶滅（EW）：飼育・栽培下でのみ存続している種
- ・絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）：絶滅の危機に瀕している種
- ・絶滅危惧ⅠA類（CR）：ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種
- ・絶滅危惧ⅠB類（EN）：ⅠA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種
- ・絶滅危惧Ⅱ類（VU）：絶滅の危険が増大している種
- ・準絶滅危惧（NT）：現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
- ・減少種：かつては県内に広く分布していたと考えられる種のうち、生息地あるいは生息個体数が著しく減少している種
- ・希少種：生息地が狭域であるなど生息環境が脆弱な種のうち、現在は個体数をとくに減少させていないが、生息地での環境悪化によっては絶滅が危惧される種

- ・ 要注意種：前回、減少種または希少種と判定され、かつては広く分布していたのに、生息地または生息個体数が明らかに減少傾向にある種
- ・ 注目種：生息環境が特殊なもののうち、県内における衰退はめだたないが、環境悪化が生じた際には絶滅が危惧される種
- ・ 情報不足（DD）：評価するだけの情報が不足している種
- ・ 不明種：過去に不確実な記録だけが残されている種
- ・ 絶滅のおそれのある地域個体群（LP）：地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高い個体群

(カ) 「横浜市環境管理計画」(横浜市環境創造局政策課、平成 30 年 11 月改定)

この計画は、環境に関する本市の計画・指針等を束ねる総合計画として策定されています。様々な面での環境に対する目標や取組等がまとめられていますが、生物多様性に関する取組等としては、表 6.2.1.27 のとおりです。

表 6.2.1.27 「横浜市環境管理計画」における生物多様性に関する環境目標等

基本施策	2025 年度までの環境目標	達成の目安となる環境の状況
生物多様性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 誰もが生活の中で自然や生き物に親しむライフスタイルを実践しています。</li> <li>・ 生き物の重要な生息・生育環境である樹林地や農地が安定的に保全されるとともに、住宅地や都心部で豊かな水・緑環境が増え、生き物のつながりが強まり、市域全体で生物多様性が豊かになっています。</li> <li>・ 企業の流通過程において、材料調達から生産工程、消費行動にわたり、生物多様性への配慮の視点が盛り込まれ、生物多様性が市場価値として大きな役割を有しています。</li> <li>・ 「市民や事業者等の主体的な行動が支える豊かな生物多様性」が横浜の都市のイメージとして定着しています。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 多様な動植物などの生き物の生息・生育環境の保全の推進</li> <li>・ 市民が、身近な自然や生き物にふれあい、楽しむ機会の増加</li> <li>・ 生物多様性に配慮した行動を自らとる市民や企業等の増加</li> </ul>

## 2) 環境保全目標の設定

動物に係る環境保全目標は、表 6.2.1.28 に示すとおり設定しました。

表 6.2.1.28 環境保全目標（動物）

区 分	環境保全目標
【工事中】 建設行為等	・ 注目すべき動物種等の動物相及びその生息環境への影響を最小限に留めること。
【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	



### 3) 予測

#### (1) 建設行為等並びに施設の存在・土地利用の変化に伴う動物相の変化の内容及びその程度

##### ① 予測項目

予測項目は、陸生動物の動物相、水生生物の生物相の変化の内容及びその程度としました。  
具体的には注目すべき動物種等を対象に予測しました。

##### ② 予測地域・地点

予測地域は、現地調査の範囲と同一の地域（図 6.2.1.1～図 6.2.1.5 p.6.2-4～p.6-2-8 参照）としました。

##### ③ 予測時期

予測時期は、工事期間全体としました。

##### ④ 予測方法

調査で把握した陸生動物の動物相、水生生物の生物相の状況及び生息環境と施工による改変の度合いを比較することで、影響の程度を定量的・定性的に予測しました。

予測地域内における動物の生息環境の現況面積と工事による改変面積の比率を表 6.2.1.29、供用後の復元の比率を表 6.2.1.30 に示します。

表 6.2.1.29 生息環境別の改変率

段階	生息環境別の改変面積 (ha)						
	樹林等	草地 (高茎)	草地 (低茎)	草地 (湿生)	その他		
					耕作地	裸地	道路・施設・住宅等
現況※1	7.70	43.96	10.71	0.81	2.34	4.87	25.45
工事中※1	4.38	43.82	10.71	0.81	0.00	3.96	14.97
改変率※2	56.8%	99.7%	100.0%	100.0%	0.0%	81.3%	58.8%

※1 現況は予測範囲内の面積（対象事業実施区域+100mの面積）、工事中は対象事業実施区域内の改変される面積を示します。なお、現況の各生息環境の分布は「第6章 6.2.3 生態系 表 6.2.3.3」（p.6.2-104）に示すとおりです。

※2 改変率は（（工事中の改変面積）／（現況の生息環境面積））×100 により算出された値になります。

表 6.2.1.30 生息環境別の復元率

段階	生息環境別の復元面積 (ha)						
	樹林等	草地 (高茎)	草地 (低茎)	草地 (湿生)	その他		
					耕作地	裸地	道路・施設・住宅等
工事中※1	4.38	43.82	10.71	0.81	0.00	3.96	14.97
供用時※1	1.47	10.88	9.85	—※2	56.45		
復元率※3	33.6%	24.8%	92.0%	0.0%	—	—	—

※1 工事中は対象事業実施区域内の改変面積、供用時は対象事業実施区域内で創出される生息環境の面積を示します。なお、供用時の各生息環境の分布は「第6章 6.2.3 生態系 表 6.2.3.4」（p.6.2-104）に示すとおりです。

※2 供用時の草地（湿生）は、草地（高茎）の中で現況と同規模の草地を確保する予定です。

※3 復元率は（（供用時の生息環境面積）／（工事中の改変面積））×100 により算出された値になります。

## ⑤ 予測条件の整理

公園及び墓園整備事業の整備方針や施設配置、施工範囲及び施工時期等の事業計画については、「第2章 2.3 都市計画対象事業の計画内容」(p. 2-6～p. 2-45)に示したとおりです。

工事中は低騒音・低振動型の建設機械の採用による騒音・振動を低減等の措置を行うほか、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、工事中における動物に対する生息環境への影響の低減を図りながら実施していきます。

また、対象事業実施区域内は公園及び墓園整備事業によって樹林等や草地（高茎、低茎、湿地）が消失しますが、草地保護区の設定による質の高い草地環境の創出を図るほか、人為的な管理（草刈り）による多様な草地環境の創出等を行うことで、生息環境に配慮した環境づくりを計画します。

## ⑥ 予測結果

予測対象各種に対する予測では、工事の実施及び供用に伴う予測対象各種の生息環境の改変の程度（表 6.2.1.31 参照。各種の生息環境に対する改変面積は図 6.2.3.1（「第6章 6.3 生態系」(p. 6.2-99)）で示す環境類型区分図をもとにGISを用いて求積。）や予測条件で記載した環境配慮事項の内容等を踏まえ、影響の程度について予測を行いました。

種別の予測結果を表 6.2.1.32～表 6.2.1.35 に示します。

表 6.2.1.31 予測対象種別の生息環境改変率

分類	種名	生息環境							生息環境 の改変率
		樹林 等	高茎 草地	低茎 草地	湿性 草地	その他			
						耕作地	裸地	道路・施設 ・住宅地等	
鳥類	コトドリ					●			0.0%
	タシギ				●				100.0%
	ツミ	重要な種の保護の観点から、非表示としております。							
	ハイタカ	●	●	●					94.4%
	オオタカ	重要な種の保護の観点から、非表示としております。							
	ノスリ	●	●	●					94.4%
	ハヤブサ	重要な種の保護の観点から、非表示としております。							
	モズ	●	●	●		●			91.0%
	ヒバリ		●	●		●			95.7%
	ツバメ		●	●		●		●	84.3%
	エゾムシクイ	●							56.8%
	セッカ		●	●		●			95.7%
	コサメビタキ	●							56.8%
	キビタキ	●							56.8%
	キセキレイ				●	●			25.6%
	カララヒ	●	●	●					94.4%
	ホオアカ		●	●		●			95.7%
	アオジ	●	●						93.3%
両生類・ 爬虫類	アズマヒキガエル	●			●				60.9%
	ヒガシホトカゲ		●	●					99.7%
昆虫類	ケラ			●	●				100.0%
	ショウリョウバッタモドキ		●						99.7%
	トゲヒゲトビイロカミキリ	●							56.8%
	ヤマトアシナガバチ	●	●	●				●	84.1%
水生生物	モノアラガイ							●	58.8%
	アサヒナコミズムシ							●	58.8%

※ 生育環境の改変率は 0%の場合は改変がなし、値が大きくなるにつれて改変される割合が高くなり、100%となると、全て改変されることを示します。

※ 各種の生息環境に対する改変面積は「第 6 章 6.3 生態系 図 6.2.3.1」(p. 6.2-99) で示す環境類型区分図をもとに GIS を用いて求積しています。

## ア 鳥類

対象事業実施区域及びその周辺において注目すべき種は 18 種確認されました。

工事の実施に伴い、対象事業実施区域内の樹林等や草地（高茎、低茎、湿地）が改変するため、これらの環境に生息する一部の種については影響を及ぼす可能性が想定されますが、公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

供用時においては、樹林等や草地（高茎、低茎）の復元を図っていきます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出、人為的な管理（草刈り）等の生息環境の保全・創出を図っていくことで、現況と同程度の機能を維持できる形で復旧を行う計画であり、時間の経過とともに生息環境として利用できる状態を回復していくことで生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.32 (1) 注目すべき種への影響予測（コチドリ）

種名		コチドリ
一般的生態等		主に夏鳥として渡来しますが、冬季の記録もあります。河川中流から下流にかけての河川敷に生息します。特に植物のまばらな砂礫地に好んで営巣しますが、造成直後の裸地や駐車場等を代替環境として利用することもあります。巣は軽く地面を窪ませて、小石や木片、葉等を敷く簡単なもので、繁殖期は 4～7 月です。
現地調査結果		対象事業実施区域周辺の耕作地で春季に 1 個体、夏季に 1 個体が確認されました。 対象事業実施区域及びその周辺での営巣は確認されていません。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である耕作地は対象事業実施区域外にあるため、生息環境は改変されず残存することから、建設行為等による生育環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種の生息環境である耕作地は対象事業実施区域外にあるため、生息環境は改変されず、供用時も残存することから、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響ほとんどない、あるいは生じないと予測します。

表 6.2.1.32 (2) 注目すべき種への影響予測 (タシギ)

種名		タシギ
一般的生態等		神奈川県内には冬鳥として渡来するシギの仲間で、水の枯れない湿地環境に生息しています。
現地調査結果		冬季に対象事業実施区域内の草地で2個体が確認されました。現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種は、冬季に対象事業実施区域内の湿地脇の草地で2個体が確認されましたが、冬季は水が枯れ、乾いた草地となっているため、本種の生息環境とは異なります。 対象事業実施区域の利用は一時的なものと考えられ、建設行為等による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種は、冬季に対象事業実施区域内の湿地脇の草地で2個体が確認されましたが、冬季は水が枯れ、乾いた草地となっているため、本種の生息環境とは異なります。 施設の存在・土地利用の変化によって、供用時には冬季でも水枯れのない新たな湿地環境やオープン式調整池等の水辺環境が草地保護区に創出されることで本種の渡り中における休息場としての利用も可能となることから、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。

表 6.2.1.32 (3) 注目すべき種への影響予測 (ツミ)

種名		ツミ
一般的生態等		留鳥の猛禽類で、主に山地の樹林等に生息し、都市公園や人家の庭等でも繁殖することが知られます。クロマツ等の高木に営巣し、普通3～5卵を産卵します。
現地調査結果		重要な種の保護の観点から、非表示としております。
予測結果	【工事中】 建設行為等	
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	

表 6.2.1.32 (4) 注目すべき種への影響予測（ハイタカ）

種名		ハイタカ
一般的生態等		冬鳥の猛禽類で、神奈川県内では個体数は少ないものの山地で繁殖している可能性もあるとされています。山地から丘陵地の森林に生息し、高木に営巣して普通 4～5 卵を産卵します。
現地調査結果		冬季に対象事業実施区域内の上空での飛翔が 3 例確認され、草地（高茎、低茎）で採餌行動が確認されました。 対象事業実施区域及びその周辺において繁殖兆候等は確認されていません。
予測結果	【工事中】 建設行為等	対象事業実施区域及びその周辺で営巣は確認されませんでした。草地（高茎、低茎）で採餌行動が確認されており、採餌場として利用していると考えられます。 本種の生息環境である樹林地及び草地（高茎、低茎）は、建設行為等により、予測地域内の約 94%が消失しますが、公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺で営巣は確認されませんでした。草地（高茎、低茎）で採餌行動が確認されており、採餌場として利用していると考えられます。 本種の生息環境である樹林地及び草地（高茎、低茎）は、施設の存在・土地利用の変化により、予測地域内の約 94%が消失しますが、対象事業実施区域周辺の樹林地は引き続き維持されるほか、対象事業実施区域内は新たな整備により樹林等は約 140%、草地（高茎）は約 14%、草地（低茎）は約 92%が復元されます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.32 (5) 注目すべき種への影響予測（オオタカ）

種名		オオタカ
一般的生態等		留鳥の猛禽類で、山麓から丘陵地の森林に生息し、主に中・小型の鳥類を捕食します。スギやマツ類等の針葉樹の高木に生息することが多く、普通 3～4 卵を産卵します。
現地調査結果		
予測結果	【工事中】 建設行為等	重要な種の保護の観点から、非表示としております。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	

表 6.2.1.32 (6) 注目すべき種への影響予測（ノスリ）

種名		ノスリ
一般的生態等		留鳥または漂鳥の猛禽類で、繁殖期には森林で営巣するものの、採餌には畑等の開けた環境をよく利用します。巣は樹上に作られ、普通 2～3 個卵を産卵します。神奈川県内の繁殖記録は稀です。
現地調査結果		冬季に対象事業実施区域周辺上空での飛翔が 1 例確認されました。対象事業実施区域及びその周辺において繁殖兆候等は確認されていません。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種は、対象事業実施区域を利用しておらず、本種による対象事業実施区域の利用頻度は低いと考えられることから、建設行為等による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種は、対象事業実施区域を利用していませんでした。本種の生息環境である樹林地及び草地（高茎、低茎）は、施設の存在・土地利用の変化により、予測地域内の約 94%が消失しますが、対象事業実施区域周辺の樹林地は引き続き維持されるほか、対象事業実施区域内は新たな整備により樹林等は約 140%、草地（高茎）は約 14%、草地（低茎）は約 92%が復元されます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.32 (7) 注目すべき種への影響予測（ハヤブサ）

種名		ハヤブサ
一般的生態等		留鳥または冬鳥として渡来する猛禽類で、主に断崖のある海岸に生息しています。営巣も同様の環境で行い、普通 3～4 卵を産卵します。神奈川県内での繁殖は稀です。
現地調査結果		重要な種の保護の観点から、非表示としております。
予測結果	【工事中】 建設行為等	
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	



表 6.2.1.32 (8) 注目すべき種への影響予測 (モズ)

種名		モズ
一般的生態等		留鳥として、県内全域で見られます。低地の林、河原、農耕地、公園等で単独で生活し、昆虫類等を摂餌して、はやにえをつくる習性があります。市街化により、緑地や草地が減少したために生息環境が狭められています。
現地調査結果		対象事業実施区域内の高茎草地や林縁で冬季に 5 個体、春季に 4 個体、夏季に 4 個体、秋季に 8 個体が確認されました。 対象事業実施区域内及び周辺で営巣している可能性が高いです。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である樹林地、草地（高茎、低茎）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の樹林地、草地（高茎、低茎）が建設行為等によって改変されるため、生息環境の約 91%が消失しますが、予測地域外にある耕作地は残存するほか、公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。
	【供用時】 施設の使用・土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺で営巣している可能性があります。 本種の生息環境である樹林地、草地（高茎、低茎）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の樹林地、草地（高茎、低茎）が施設の使用・土地利用の変化によって改変されるため、生息環境の約 91%が消失しますが、予測地域外にある耕作地や対象事業実施区域周辺の樹林地は引き続き維持されるほか、対象事業実施区域内は新たな整備により樹林等は約 140%、草地（高茎）は約 14%、草地（低茎）は約 92%が復元されます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の使用・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。

表 6.2.1.32 (9) 注目すべき種への影響予測 (ヒバリ)

種名		ヒバリ
一般的生態等		留鳥として、広い草地のある河川敷や農耕地等に生息しています。背の低い草本が優占し、地面が露出程度のまばらな乾いた草原を特に好み、イネ科等の植物の株際の地上、株内の低い位置に巣を作ることが知られています。広い農耕地や、主として背の低い草本が生育する草原の減少により生息地が減少しています。
現地調査結果		対象事業実施区域内の草地（低茎が優占）で冬季に 4 個体、春季に 7 個体、夏季に 5 個体、秋季に 13 個体が確認されました。 対象事業実施区域内及び周辺で営巣している可能性が高いです。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である草地（高茎、低茎）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の草地（高茎、低茎）が建設行為等によって改変されるため、生息環境の約 96%が消失しますが、予測地域外にある耕作地は残存するほか、公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。
	【供用時】 施設の使用・土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺で営巣している可能性があります。 本種の生息環境である草地（高茎、低茎）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の草地（高茎、低茎）が施設の使用・土地利用の変化によって改変されるため、生息環境の約 96%が消失しますが、予測地域外にある耕作地は引き続き維持されるほか、対象事業実施区域内は新たな整備により草地（高茎）は約 14%、草地（低茎）は約 92%が復元されます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の使用・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。

表 6.2.1.32 (10) 注目すべき種への影響予測 (ツバメ)

種名		ツバメ
一般的生態等		夏鳥として県内全域の集落、都市に渡来します。繁殖は人間の居住空間と密接に結びつき、人間が出入りする建物の軒下に、泥や草を唾液で固めた碗型の巣を造ります。高層の建物であっても、巣の位置は人間の行動圏に接した低い場所に限られます。
現地調査結果		対象事業実施区域内の広範囲で春季に 8 個体、夏季に 11 個体が確認されました。対象事業実施区域内及び周辺での営巣は確認されていません。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である草地（高茎、低茎）、その他（耕作地、道路・施設・住宅等）のうち、予測地域内の草地（高茎、低茎）、その他（道路・施設・住宅等）が建設行為等によって改変されるため、生息環境の約 80% が消失しますが、予測地域外にある耕作地や道路・施設・住宅等は残存するほか、営巣環境となる住宅等の建物は周辺にも多く存在しています。また、公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響はほとんどないと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺での営巣は確認されていません。本種の生息環境である草地（高茎、低茎）、その他（耕作地、道路・施設・住宅等）のうち、予測地域内の草地（高茎、低茎）、その他（道路・施設・住宅等）が施設の存在・土地利用の変化によって改変されるため、生息環境の約 84% が消失しますが、予測地域外にある耕作地は残存するほか、営巣環境となる住宅等の建物が多く存在しています。また、新たな整備により対象事業実施区域内の草地（低茎）は約 92% が復元されます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.32 (11) 注目すべき種への影響予測 (エゾムシクイ)

種名		エゾムシクイ
一般的生態等		夏鳥として低山から亜高山帯にかけての広葉樹林に生息します。傾斜が急で崖がある山を好みます。樹上生活が主であるが、稍近くよりも、低い下枝にとまることが多いです。崖のくぼみや穴の奥に主に蘚類を材料にして横に出入口のある球形の巣を造ります。
現地調査結果		対象事業実施区域外の樹林等で春季に 1 個体が確認されました。現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。渡り時期の移動個体が確認されたものと考えられます。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種は、春季に対象事業実施区域外の樹林等で 1 個体が確認されました。本種は夏鳥として山地の樹林地で繁殖を行う種であり、当該地域は生息環境とは異なること、春季に確認されたことを踏まえると渡り時期の移動個体が確認されたものと考えられます。そのため、対象事業実施区域の利用は一時的なものと考えられることから、建設行為等による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種は、春季に対象事業実施区域外の樹林等で 1 個体が確認されました。本種は夏鳥として山地の樹林地で繁殖を行う種であり、当該地域は生息環境とは異なること、春季に確認されたことを踏まえると渡り時期の移動個体が確認されたものと考えられます。そのため、対象事業実施区域の利用は一時的なものと考えられることから、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。また、対象事業実施区域内は新たな整備により樹林等は約 140% が復元され、本種の渡り中における休息としての一時利用も可能となることから、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。

表 6.2.1.32 (12) 注目すべき種への影響予測（セッカ）

種名		セッカ
一般的生態等		留鳥として河原や水田周辺の草原に生息します。電線にとまったり、草の間をくぐったり、地上を歩きながら餌を採ります。草の茎や葉の間に巣を造ります。
現地調査結果		対象事業実施区域内の高茎草地や低茎草地で春季に 2 個体、夏季に 8 個体が確認されました。 対象事業実施区域内及び周辺で営巣している可能性が高いです。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である草地（高茎、低茎）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の草地（高茎、低茎）が建設行為等によって改変されるため、生息環境の約 96%が消失しますが、予測地域外にある耕作地は残存するほか、公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺で営巣している可能性があります。 本種の生息環境である草地（高茎、低茎）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の草地（高茎、低茎）が施設の存在・土地利用の変化によって改変されるため、生息環境の約 96%が消失しますが、予測地域外にある耕作地は引き続き維持されるほか、対象事業実施区域内は新たな整備により草地（高茎）は約 14%、草地（低茎）は約 92%が復元されます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.32 (13) 注目すべき種への影響予測（コサメビタキ）

種名		コサメビタキ
一般的生態等		夏鳥として渡来し、山地から丘陵地にかけての明るい林で繁殖します。秋の渡りの季節には、丘陵地や市街地の公園で観察されます。枝先から飛んでいる昆虫をねらい捕らえます。
現地調査結果		対象事業実施区域外の樹林等の中で秋季に 2 個体が確認されました。現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。渡り時期の移動個体が確認されたものと考えられます。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種は、秋季に対象事業実施区域外の樹林等で 2 個体が確認されました。本種は夏鳥として山地から丘陵地にかけての明るい林で繁殖を行う種であり、当該地域は生息環境とは異なること、秋の渡り時期になると市街地でも確認されることを踏まえると秋の渡り時期の移動個体が確認されたものと考えられます。 そのため、対象事業実施区域の利用は一時的なものと考えられることから、建設行為等による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種は、秋季に対象事業実施区域外の樹林等で 2 個体が確認されました。本種は夏鳥として山地から丘陵地にかけての明るい林で繁殖を行う種であり、当該地域は生息環境とは異なること、秋の渡り時期になると市街地でも確認されることを踏まえると秋の渡り時期の移動個体が確認されたものと考えられます。 なお、対象事業実施区域内は新たな整備により樹林等は約 140%が復元され、本種の渡り中における休息としての一時利用も可能となることから、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。

表 6.2.1.32 (14) 注目すべき種への影響予測 (キビタキ)

種名		キビタキ
一般的生態等		夏鳥として山地から丘陵地のよく茂った落葉広葉樹林に渡来します。枝から枝に渡り採食することが多いです。繁殖は落葉広葉樹、針広混交林で行われ、巣は茂みの中や枝のまた、樹洞を利用して造ります。
現地調査結果		対象事業実施区域外の樹林等の中で春季に1個体が確認されました。現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である樹林地は、建設行為等により、予測地域内の約57%が消失しますが、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。
	【供用時】 施設の存在・ 土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺での営巣は確認されていません。本種の生息環境である樹林地が施設の存在・土地利用の変化によって改変されるため、生息環境の約57%が消失しますが、対象事業実施区域周辺の樹林地は引き続き維持されるほか、新たな整備によって対象事業実施区域内の樹林等は約140%が復元されることから、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。

表 6.2.1.32 (15) 注目すべき種への影響予測 (キセキレイ)

種名		キセキレイ
一般的生態等		留鳥または漂鳥として、平地から山地の川岸、湖沼、水田、農耕地に生息します。常に尾を上下に振りながら、主に水辺を歩き、水生昆虫等を捕食します。また、水辺の石や流木にとまり、飛ぶ虫に向かってフライングキャッチ等も行います。人家の屋根や橋桁、樹木等にお椀型の巣を造ります。
現地調査結果		対象事業実施区域内の草地で秋季に1個体が確認されました。現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である草地（湿生）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の草地（湿生）が建設行為等によって改変されるため、生息環境の約26%が消失しますが、予測地域外にある耕作地は残存するほか、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。
	【供用時】 施設の存在・ 土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺での営巣は確認されていません。本種の生息環境である草地（湿生）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の草地（湿生）が施設の存在・土地利用の変化によって改変されるため、生息環境の約26%が消失しますが、予測地域外にある耕作地は引き続き維持されます。また、公園内には新たな湿地環境やオープン式等の水辺環境、約2.9haの草地（高茎）を主としたまとまった草地環境が草地保護区に創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境となる水辺環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。

表 6.2.1.32 (16) 注目すべき種への影響予測（カワラヒワ）

種名		カワラヒワ
一般的生態等		留鳥としてほぼ全域に生息しますが、繁殖記録は平野部に多く山間部にはほとんど確認されません。市街、村落、道路付近等の林や独立樹等に営巣し、巣は 3～7m の高さの枝上にあります。雑木林や農耕地の減少により、個体数が減少しています
現地調査結果		対象事業実施区域内の樹林地等や草地等で冬季に 4 個体、春季に 3 個体、夏季に 1 個体、秋季に 5 個体が確認されました。 対象事業実施区域内及び周辺で営巣している可能性が高いです。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である樹林地及び草地（高茎、低茎）は、建設行為等により、予測地域内の約 94%が消失しますが、公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺で営巣している可能性があります。 本種の生息環境である樹林地及び草地（高茎、低茎）は、施設の存在・土地利用の変化により、予測地域内の約 94%が消失しますが、対象事業実施区域周辺の樹林地は引き続き維持されるほか、対象事業実施区域内は新たな整備により樹林地等は約 140%、草地（高茎）は約 14%、草地（低茎）は約 92%が復元されます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.32 (17) 注目すべき種への影響予測（ホオアカ）

種名		ホオアカ
一般的生態等		主に冬鳥として渡来し、河原や農耕地、草地に生息します。繁殖は、草原や灌木の散在する草原でおこないます。地上をはね歩き、草の実を採食します。県内では、人為的な開発の影響で河原や、休耕田、草地が減少し、生息地が減少しています。
現地調査結果		対象事業実施区域内の比較的高茎の草地や灌木上で冬季に 3 個体が確認されました。 現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である草地（高茎、低茎）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の草地（高茎、低茎）が建設行為等によって改変されるため、生息環境の約 96%が消失しますが、予測地域外にある耕作地は残存するほか、公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺での営巣は確認されていません。 本種の生息環境である草地（高茎、低茎）、その他（耕作地）のうち、予測地域内の草地（高茎、低茎）が施設の存在・土地利用の変化によって改変されるため、生息環境の約 96%が消失しますが、予測地域外にある耕作地は引き続き維持されるほか、対象事業実施区域内は新たな整備により草地（高茎）は約 14%、草地（低茎）は約 92%が復元されます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.32 (18) 注目すべき種への影響予測（アオジ）

種名		アオジ
一般的生態等		開けた森林や林縁に生息する種で、植物の種子や昆虫類を食べ、地表や低木の樹上に営巣します。繁殖期には平地から低山の雑木林や農耕地、河川敷の草やぶ、人家の庭等でもみられます。県内では箱根で繁殖例が記録されています。
現地調査結果		対象事業実施区域内の高茎草地や林縁で冬季に2個体が確認されました。現地調査において対象事業実施区域内での営巣は確認されていません。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の主な生息環境である樹林地及び草地（高茎）は、建設行為等により、予測地域内の約93%が消失しますが、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、生息環境への影響は最小限に留めると予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	対象事業実施区域及びその周辺での営巣は確認されていません。本種の生息環境である樹林地及び草地（高茎）は、施設の存在・土地利用の変化により、予測地域内の約93%が消失しますが、対象事業実施区域周辺の樹林地は引き続き維持されるほか、対象事業実施区域内は新たな整備により樹林等は約140%、草地（高茎）は約14%が復元されます。また、公園内には約2.9haの草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。

## イ 両生類・爬虫類

対象事業実施区域及びその周辺において注目すべき種は2種確認されました。

工事の実施に伴い、対象事業実施区域内の草地（高茎、低茎、湿地）が改変するため、これらの環境に生息する一部の種については影響を及ぼす可能性が想定されますが、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。

供用時においては、草地（高茎、低茎）の復元を図っていきます。また、公園内には約2.9haの草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出、人為的な管理（草刈り）等の生息環境の保全・創出を図っていくことで、現況と同程度の機能を維持できる形で復旧を行う計画であり、時間の経過とともに生息環境として利用できる状態を回復していくことで影響は最小限に留めると予測します。

表 6.2.1.33 (1) 注目すべき種への影響予測（アズマヒキガエル）

種名		アズマヒキガエル
一般的生態等		平地から山地までの林床に広範囲に生息し、社寺や人家の庭にも住み着いています。早春の産卵期には、多数の個体が産卵場所に集まって集団産卵をします。
現地調査結果		対象事業実施区域外の水路や池で春季に1,000個体以上の幼生が確認されました。 対象事業実施区域の周辺で繁殖しています。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の産卵環境は対象事業実施区域外であり、産卵場となる水域及び樹林等の環境は今後に残存することから、建設行為等による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種の産卵環境は対象事業実施区域外であり、産卵場となる水域及び樹林等の環境は今後に残存することから、土地の改変による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。

表 6.2.1.33 (2) 注目すべき種への影響予測（ヒガシニホントカゲ）

種名		ヒガシニホントカゲ
一般的生態等		日当たりの良い石や石垣の隙間、土手の斜面の穴等に生息し、ミミズやクモ、昆虫等を捕食します。幼体の尾は鮮やかなコバルトブルーだが、この色は成長と共に消えます。
現地調査結果		対象事業実施区域及びその周辺の高茎草地や瓦礫の下等で、春季に5個体の成体、夏季に4個体の成体、秋季に1個体の幼体が確認されました。 対象事業実施区域及びその周辺で繁殖しています。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である草地（高茎、低茎）は、建設行為等により、予測地域内の約100%が消失しますが、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種の生息環境である草地（高茎、低茎）は、施設の存在・土地利用の変化により、約100%が消失しますが、対象事業実施区域内は新たな整備により草地（高茎）は約14%、草地（低茎）は約92%が復元されます。また、公園内には約2.9haの草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めると予測します。



## ウ 昆虫類

対象事業実施区域及びその周辺において注目すべき種は4種確認されました。

工事の実施に伴い、対象事業実施区域内の樹林等や草地（高茎、低茎、湿地）が改変するため、これらの環境に生息する一部の種については影響を及ぼす可能性が想定されますが、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

供用時においては、草地（高茎、低茎）の復元を図っていきます。また、公園内には約2.9haの草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出、人為的な管理（草刈り）等の生息環境の保全・創出を図っていくことで、現況と同程度の機能を維持できる形で復旧を行う計画であり、時間の経過とともに生息環境として利用できる状態を回復していくことで影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.34 (1) 注目すべき種への影響予測（ケラ）

種名		ケラ
一般的生態等		湿地に穴を掘ってすむ種で、水田付近に多く、円筒型の体形、細かい毛の密生、前足の発達等穴居に適した形態を備えています。雄はブーという単調な声で鳴きます。
現地調査結果		対象事業実施区域内の低茎草地で春季に3個体、秋季に2個体が確認されました。 対象事業実施区域及びその周辺で繁殖しています。
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である草地（低茎及び湿生）は、建設行為等により、予測地域内の約100%が消失しますが、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種の主な生息環境である草地（低茎及び湿生）は、施設の存在・土地利用の変化により、予測地域内の約100%が消失しますが、対象事業実施区域内は新たな整備により草地（低茎）は約92%が復元されます。また、公園内には新たな湿地環境やオープン式調整池等の水辺環境、約2.9haの草地（高茎）を主としたまとまった草地環境が草地保護区に創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境となる水辺環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.34 (2) 注目すべき種への影響予測（ショウリョウバッタモドキ）

種名	ショウリョウバッタモドキ	
一般的生態等	丘陵地のチガヤ等の茂る土堤に見られ、葉の裏に身を伏せるようにとまっているので見つかりにくいです。飛ぶことはほとんどありません。年 1 回秋に成虫が出現します。	
現地調査結果	対象事業実施区域内の高茎草地で秋季に 3 個体が確認されました。対象事業実施区域及びその周辺で繁殖しています。	
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の主な生息環境である草地（高茎）は、建設行為等により、予測地域内の約 100%が消失します。公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種の主な生息環境である草地（高茎）は、施設の存在・土地利用の変化により、予測地域内の約 100%が消失しますが、対象事業実施区域内は新たな整備により草地（高茎）は約 14%が復元されます。また、公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.34 (3) 注目すべき種への影響予測（トゲヒゲトビイロカミキリ）

種名	トゲヒゲトビイロカミキリ	
一般的生態等	ヤブニッケイかタブノキ(クスノキ科)を寄主植物とし、県内では横須賀市や三浦市等、一部地域が生息地として知られているのみです。	
現地調査結果	対象事業実施区域内外の樹林地等で夏季に 2 個体が確認されました。対象事業実施区域及びその周辺で繁殖しています。	
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境である樹林地は、建設行為等により、予測地域内の約 57%が消失しますが、公園及び墓園整備事業は工区を 3 分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施されることから、建設行為等による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種の生息環境である樹林地が施設の存在・土地利用の変化によって改変されるため、生息環境の約 57%が消失しますが、対象事業実施区域周辺の樹林地は引き続き維持されるほか、新たな整備によって対象事業実施区域内の樹林地等は約 140%が復元されることから、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めることができると予測します。

表 6.2.1.34 (4) 注目すべき種への影響予測（ヤマトアシナガバチ）

種名	ヤマトアシナガバチ	
一般的生態等	県内では三浦半島の数カ所のみが生息地として知られているのみです。	
現地調査結果	対象事業実施区域内の疎林で春季に 1 個体が確認されました。本来の生息分布とは異なるため、他地域から飛来してきた個体が偶発的に確認されたものと考えられます。	
予測結果	【工事中】 建設行為等	当該地域は本種の生息分布とは異なることから、他地域から飛来してきた個体が偶発的に確認されたものと考えられます。そのため、対象事業実施区域の利用頻度は低いと考えられ、建設行為等による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	当該地域は本種の生息分布とは異なることから、他地域から飛来してきた個体が偶発的に確認されたものと考えられます。そのため、対象事業実施区域の利用頻度は低いと考えられ、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響はほとんどない、あるいは生じないと予測します。

## エ 水生生物

対象事業実施区域及びその周辺において注目すべき種は2種確認されました。

モノアラガイ、アサヒナコミズムシ共に工事の実施に伴い、生息が確認された囲障区域内に設置された人工水槽（プール）が消失することから、生育環境への影響は大きいと予測します。

表 6.2.1.35 (1) 注目すべき種への影響予測（モノアラガイ）

種名	モノアラガイ	
一般的生態等	殻高 20 mm前後の巻貝。池沼や水田、川の淀み等の水草や礫に付着している。	
現地調査結果	対象事業実施区域内の囲障区域内に設置された人工水槽（プール）で春季に4個体、夏季に2個体が確認されました。 対象事業実施区域で繁殖しています。	
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境となっている囲障区域内に設置された人工水槽（プール）は建設行為等によって消失することから、建設行為等による生育環境への影響は大きいと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種の生息環境となっている囲障区域内に設置された人工水槽（プール）は、施設の存在・土地利用の変化によって消失しますが、対象事業実施区域外に分布する水域（わきみずの森）は引き続き維持されるほか公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めるとできると予測します。

表 6.2.1.35 (2) 注目すべき種への影響予測（アサヒナコミズムシ）

種名	アサヒナコミズムシ	
一般的生態等	平地から山間部の水田やため池で見られる種。公園の池やプール等、市街地周辺でも見られる。	
現地調査結果	対象事業実施区域内の囲障区域内に設置された人工水槽（プール）で冬季に1個体が確認されました。 対象事業実施区域で繁殖しています。	
予測結果	【工事中】 建設行為等	本種の生息環境となっている囲障区域内に設置された人工水槽（プール）は建設行為等によって消失することから、建設行為等による生育環境への影響は大きいと予測します。
	【供用時】 施設の存在・土地利用の変化	本種の生息環境となっている囲障区域内に設置された人工水槽（プール）は、施設の存在・土地利用の変化によって消失しますが、対象事業実施区域外に分布する水域（わきみずの森）は引き続き維持されるほか公園内には約 2.9ha の草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区が創出されることで、環境の集約化による質の高い草地環境の創出等、生息環境の保全に配慮していきます。よって、施設の存在・土地利用の変化による生息環境への影響は最小限に留めるとできると予測します。

#### 4) 環境の保全のための措置

環境の保全のための措置は、公園及び墓園整備事業による動物相及びその生息環境への影響を最小限に留めるため、表 6.2.1.36 に示す内容を実施します。

表 6.2.1.36 環境の保全のための措置

区分	環境の保全のための措置
【工事中】 建設行為等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生息環境への影響が大きいと予測されたモノアラガイ、アサヒナコミズムシについては、工事着手前に再度生息の有無について確認を行い、生息が確認された場合は必要に応じて専門家の意見等を踏まえ、工事着手前に移設を行います。なお、移設の位置や方法については、今後事後調査計画を策定する段階で検討します。</li> <li>・公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、生息環境への影響の低減を図りながら実施します。</li> <li>・動物の生息環境となる草地（チガヤ群落）は表土の移設を行います。</li> <li>・動物の避難経路の確保に配慮した施工に努め、建設機械の稼働が集中しないような工事計画を策定することにより、人圧等による動物への影響が低減できるよう配慮します。</li> <li>・夜間作業は原則として行わず、照明等による夜行性動物への影響をできる限り回避します。また、作業員の出入りや重機の稼働時間を規定することで、周辺に生息する動物への人圧低減効果が見込まれます。</li> <li>・工事区域外への不必要な立ち入り等を制限することで踏みつけ等による保全対象種への影響回避が見込まれます。</li> <li>・可能な限り低騒音型・低振動型建設機械を採用する等、騒音・振動の低減に努めます。</li> </ul>
【供用時】 施設の使用・土地利用の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象事業実施区域内にできる限り樹林等、草地（高茎、低茎）の復元を図るとともに、公園内には約2.9haの草地（高茎）を主としたまとまった草地保護区の創出を図ることで、人圧等による動物への影響が低減できるような計画を策定します。</li> <li>・保護区内は草刈りの頻度を人為的に調整し、草丈のまばらな高茎草地・低茎草地をパッチ状に形成させ、構成種や草丈が様々となる質の高い草地環境を創出・集約化を図ることで、草地（高茎・低茎）の生態系の維持・多様化を図っていきます。</li> <li>・樹林等の環境では、郷土種を主体とした生物多様性向上に貢献する植栽計画を行い、高木、中木、低木、草本を組み合わせます。</li> <li>・草地環境では、草刈りの頻度を人為的に調整し、草地（高茎）や草地（低茎）がまばらな草地環境がパッチ状に形成させていくことで、草地（高茎）に生息する種に対する生息環境の代償効果を見込むことができ、人圧等による動物への影響低減が図られた計画を策定します。</li> <li>・駐車場や野球場、球技場、テニスコート、陸上競技場等の利用や通路等に設置される照明（園内灯）は、昆虫類が好む紫外線をカットし、誘引性を低減させるLEDランプや高圧ナトリウムランプを使用します。</li> <li>・カラス類やクリハラリス、アライグマ等の外来種が残飯等に依存して増加することがないようにごみの処理を適切に行います。</li> </ul>

## 5) 評価

### (1) 建設行為等並びに施設の存在・土地利用の変化に伴う動物相の変化の内容及びその程度 【工事中（建設行為等）】

工事によって対象事業実施区域内を改変するため、樹林等や草地（高茎、低茎、湿生）が消失することから、これらの環境に生息する種に影響を及ぼす可能性が想定されますが、公園及び墓園整備事業は工区を3分割にし、段階的な整備を行うことで、建設行為等による生息環境への影響は低減されると予測します。また、動物の生息環境として質の高い草地（チガヤがまをもって生育する箇所）は極力保全するよう努めるほか、動物の避難経路の確保に配慮した施工、建設機械の稼働が集中しないような計画を策定、可能な限り低騒音型・低振動型建設機械を採用する等の措置を行うことで、生息環境への影響の低減を図っていきます。なお、影響が大きいと予測される種（モノアラガイ、アサヒナコミズムシ）については、工事着手前に再度生息状況を確認したうえで、必要に応じて専門家の意見等を踏まえ、移設を行うことで生息への影響に配慮します。

### 【供用時（施設の存在・土地利用の変化）】

公園・墓園として供用するにあたっては、施設の存在・土地利用の変化によって生息環境へ一時的な消失が想定されますが、樹林等や草地環境の復元を図るとともに、草地保護区の創出等により現況と同程度の機能を維持できる形で復旧を行う計画であり、時間の経過とともに生息環境として利用できる状態に回復できると考えます。よって、動物の生息環境はおおむね維持され、生息するに動物相についても影響はほとんどないと予測します。また、適切な維持管理（人為的な草刈りの調節による多様な草地環境の創出、カラス類や外来種等が増加しないための適切な管理）、郷土種を用いた植栽等の保全のための措置を行う予定であり、生息環境への影響の低減及び回避ができるものと考えます。

このように、予測結果を踏まえ、工事中及び供用時において、環境の保全のための措置を適切に講ずることで、環境保全目標「注目すべき動物種等の動物相及びその生息環境への影響を最小限に留めること」は達成されるものと考えます。